ビアトリス

九月號

リグレー式チウインガムは贅澤品に非ず

リグレー式チウインガムが、世界的の流行を極めて居るのは、菓子と、清涼劑と、口中香錠との三特色を兼ねて居るからで御座います。

然し乍ら、**チウインガム**は世間の思つて居るやうな、單なる贅澤品では無く、立派な衞生上の新必要品である事は、すべての専門大家、就中、公平なる齒科醫諸氏の等しく承認せられて居る處で御座います。

チウインガムの主要な特効と申しますのは、

薄荷が口中の酸の醗酵を止め、又ゴムは、楊子やブラシでは掃除のできぬ、齒の間の汚物をきれいに除きます。

それ故、口中は常に清潔爽快で、不快なる惡臭を除き、且つ齒痛にかゝる原因の大部分は失せて了ひます。

ペプシネが胃を丈夫にし、又ゴムを嚙むに從つて出る唾液が、渇を醫し、消化を助けます。

ゴムは決して無くならず、嚙んでさへ居れば無限の御樂しみとなり、良き御退屈凌ぎとなります。

かように、立派な衞生的必要品であつて、贅澤品で無ければこそ、目下、英佛兩國の政府は、毎月莫大なる**リグレー**式**チウインガム**を買入れて、戰線の塹壕内に在て獨軍と戰つて居る、聯合軍の將士に絕へず供給して居る位であります。

□一包金十錢、菓子、煙草、藥店等にあり

□御買求の節說明の**チラシ**御請求を乞ふ

東京市銀座通新橋際

發賣元 **リグレー株式會社**

電話新橋三二六七番

ビアトリス第一巻第三號　目次

附錄

ビアトリス

第一巻 第三號

我れは曚々見たり、朝ぼらけ 二二
東は薔薇もて飾られ、
空あきらかに、日の女王の
柔かき影して高くのぼるを、 二五
その輝きは狹霧もてつつまれたれば、
我が眼は長く眺むるを得たりき。
その如く天人の手より投げられ、 二八
車のうちそとに迷ふ花雲の中より、
橄欖の枝を冠となし、
燃え立つ紅の衣のうへ、 三一
綠の袿をまとひ、白き面紗したる
女性の姿こそは現れたれ。

『泣くことなかれ、なほ泣くことなかれ 五五
ああダンテ、泣くは凡ての惱みより
汝にふさはしきこととなれども。

我れを眺めよ、我れこそはビアトリスなれ』 七三

――ダンテ『神曲』淨罪界第三十歌――

秋風

久保田富江

あなたをお苦しめしたことをどんなにか悲しく思ひます。許して下さい。許して下さい。そして、私がどのやうなことを告白致しませうとも、あなたはそれを恨んで下さいますな。どうか私を憎まずにゐて下さい。私のすべてをすつかりお打明け致ませう。

私は實際切ないのです。私のそれをお話しして了つたら、あなたはどれ程の苦痛と失望をお感じになることでせう。靜に純に美しく見える私の心の表の蔭に、こうした秘密、それに伴ふ悲哀と執着がひそんでゐると御存じになりましたら、今私のために苦しんでゐらつしやるあなたは、きつと、きつと深くお悲しみになることでせう。私はあなたに打明けるに忍びないのです。そしてあなたを突落すやうな慘酷な眞似はしたくないのです。いつそ出來ることなら、此儘默つてゐて私の願ひますやうに、此の戀を揉み消しては下さらないでせうか。

あなたのあの熱烈なお手紙をいたゞきました時、矢張り私は驚いたのでした。然し、私は何時もの

冷靜に立ち戻れてあれをすつかり讀み切りました。あなたの慄へるやうな熱烈な戀のお言葉をきくには、私の心はあまりに靜かすぎる位でした。若しこれが惡い意味に取れましたら許して下さい。熱いたゞけで靜になれた、などゝはほんとうに冷めたい云ひ草です。でも私は考へました。考へずにはゐられないことです。そして終ひには苦しくなりました。私が少しも知らなかつた間に、それほどあなたがお苦しみになつてゐらつしやつたといふことを想つてみて、お察ししずにはゐられなくなりました。あなたが眞面目な方でおありなだけ、そのお苦しみも一層切なるものであらうとお察しするのです。私は悲しく思ひます。許して下さい。許して下さい。

私はあの情無い御返事を上げましてから、暫くは想の上をお偲びもしておりました。失望なすつて苦しんでゐらつしやるだらう、どんなにか……。あの手紙も考へて考へて考へ拔いた結果、漸つとあれだけ書いて差上げたのですが、あれを御覽になります通り、私は飽迄あなたの切ないお心を、無造作らしく踏みつけて了はねばならない行詰つた心的境界にあるので御座います。此の戀はお捨てなすつて下さいと泣いてお頼みしなければならないのです。戀も情も知らない初心な者でもありませんから、怖さに逃げるわけでもなし、單に自尊のあまりはねつけるやうなことでもありません。私は眞にまじめに、あなたのためを想つてお諦め下さいと申上げたいのです。

もと／＼私が孤獨に堪へ兼ねる女で、萬一あなたに戀の觀念を持つて接しておりましたなら、あなたがこゝまでお心を明す時までお苦しみになるやうな、そんなお苦しみをおさせしなかつたかも知れませぬ。本當を申しませば、私は決してあなたを、純な親しい友以上の或る要求から認めて、お交りしてはをりませんでした。露骨に云へば私はあなたを戀してはをらなかつたのです。それにつれて又

私の心では、あなたが私を戀して下さらうとは考へてゐませんでした。否、今でもあなたは私になど戀する方ではないやうに信じてゐます。あなたと私の清い友人關係の間に、戀など考へてもならないことだと思ふのです。私の胸にはまだ幾程繰返して見ても、あなたが戀の對照者として、現はれては來ないので御座います。假令こゝで何のやうにあなたを想ふことの出來る私になれませうとも、私の、戀を避ける心は、到底此の戀を容れてはくれないでありませう。私の心は或る物の爲めに充實になつてそれ以上の物を入れるにはあまりに小さいので御座います。

と云つて、無下にあなたのお心のみを踏付けるわけでは決してないことをお知り置き下さい。私には戀の出來ない理由がある、戀を封じられた運命が追從してゐます。要するにそれを委しく申せば、私一人が、自ら戀を封じて了つてゐると見えるのです。まだ若い身空で、あり餘る戀の想を封じ込むなどゝは、笑止な沙汰ではありませんか。けれど、人は何と批判しようと、世間的に内氣な溫順な女として、廣い社會へ媚びるわけでもないのですから、私は私で戀を封じることに誰はゞかる所もないと思つてゐます。只悲しいのは、私を戀する人たちの熾烈な要求に、一時として報ひることが出來ないばかりです。若し、私が新らしい戀に心を捉はれ、其のための煩悶をしなければならない時がありましたら、今の私の決心を徹底させるために、其の當時の精神を裏切つても、煩悶からすり拔け苦痛を破つて、潔く自殺をするまでゝす。

その理由（所謂私の心に秘めた一事）を、どんな風にお明して、あなたの御得心を促したらよろしいでせうか。おきかせするのはいつそもう辛いことです。あなたもお聞きになつたら、お胸は張り裂けるばかりにお苦しみ遊ばしませう。あなたはそれをお知りになつても。必ず恨んで下さいますな。

うけれど。

かつたので御座いますから……。疾から知つてゐたなら、それは何とか辯解のしようも御座いませ

私を惜まずにゐて下さい。あなたが私をそれほど想つてゐて下すつたことは、それこそ夢にも存じな

私が心に秘むるものを持つてゐて、何氣なく裝つてゐながら、いろ／＼の方面へ男子と交際を廣めて行き、その間に私を戀ふる人が幾人か出來、而して各々其の熱情を發表するとしまして、若し其人たちに好いやうなことばかり云つてゐましたら、どうでせう。私は男子を無意識に弄する女になるわけではないでせうか。私は正直にすべての人に接して行きたいのです。其の以上は、どなたの前にも邪氣なく自分を開放しなければなりません。開放した自分にはやましいことや暗いやうな事を欲してはならない制限があると思ひます。今これから私が語らうとする事故が、萬一あなたの御悲哀の頂上に手痛く觸れて、私に弄されたとか、或はあざむかれたとかいふやうな、――少しでも一瞬間にでもそんなやうな――御感情がお起りになりましても、それはあなたのお心を私がまるで知らなかつたのですから、お許し下さいまし。また知つてからにしましても、今それに就いて申譯ないとかいふやうなことは云へないので御座います。何故ならば、私の心は古くから／＼或る一事に捉はれて動かずなつてをりました。その一事のために、可成り世間の義理も親の恩も滅茶にして來たので御座いますから。

もう大抵淡くもお心に響いたことだらうと存じます。(御免下さい。)私には唯一人の愛人があるので御座います。………戀をすればそれに伴ふ獨特の苦痛は、私だつて深く味つて來てをります。男に依らず女に拘らず、戀の苦しみは同じ物に違ひなからうと思ひます。――あなたもさぞお苦しいことで

御座いませう。――其の愛人に對する私の戀は、この私が生れ初めて二十年間の、これと思ふあらゆる熱と愛情を、一つに凝らして了つたやうなもので御座いました。敢て初戀ではありませんが、私に似合はぬ突詰めた戀をしたのです。と同時に其の苦痛も煩悶も一層大きく烈しいものでした。此の身此の心、私のすべての物を振り切り絞り盡して、殆ど我れを失つても、愛し足りない戀し足りない、恐らく苦しみ足りない位だつたのです。尤も私といふ女は、その戀を得るまでにはあまりに理智的で、寧ろ戀する男の心理を卑しいものとし、戀さるゝ女は弄ばれるものと信じ、戀をすれば女は男に一歩下らねばならないといふ自尊から、却て彼の誠意をおろそかにし、嘲ひ〳〵戀の手を素早く逃げては、巫山戲て掌を打ち合つてゐたのでした。佨迄なき切つてゐた私は、一度彼の手に捉はれましても、自分自身は『誰が戀なんかするものか。』といふやうな調子で、自分の心は既に彼の物であると知りながら、あまりに馬鹿にしたやうな氣分で、戀の相手に接してゐたのです。けれども、彼は私を赤坊のやうに外らさず取扱ひ、愛して〳〵愛し拔いて、其のために彼も私もどんなにか苦しい想ひをしましたでせう。私は遂に彼を此上なく戀して了つたのです。今迄の不眞面目なおどけ半分の私を打つて變つて、眞劍な惱ましい戀の子になつたので御座います。私の狂的に近い情熱は、自分を苛み責めるは勿論、彼をも苦しめ殺さんばかりの專念に充ちるのでした。彼は段々と私の一行一言に悲しい位の目を向けるやうになりました。私の戀慕は、彼が私を愛し初めた美しい愛以上に、彼へ向つて、被ひかゝる程の大きさになつたのです。私の感情が彼を虐げるやうになつて了つたのです。私の戀の感情が、次第に復雜に、次第に騷々しいものになつて行つたのでした。今迄戀の上には前後を見廻すが故に、燃えることの出來なかつた用心深い私が、彼との戀には恰も痴呆を見る如き、空虚な女になつて了ひま

したのです。

ところで、性來不徹底な私は、斯くほどの熱度を以て男に戀しながら、遂に男の言葉に出た結婚を退けて了ひました。何故か今になつて見ると退けたわけは少しも分りませんが、兎に角『いやです』と判然口に出して拒絶したのです。(尤も彼が申したのも眞實だつたか嘘であつたかわかりませんが)私は後悔しました。結婚を退けたのを後悔しました。今更より以上に後悔の度は烈しくなるばかりなのです。それは私の戀する彼が他のひとゝ結婚することになりましたがために……。彼の緣談は私との淡い戀が初つてから定つたことでした。其の前に私が彼に、彼と結婚しようと云へば、きつと(私の慾目か知れませんけれど)彼は快く圓滿な解決をつけさしたに違ひありません。私は馬鹿でした。彼の緣談がまとまつて、最早やどうにも動かしやうの無くなつた時、初めて醒めて彼に結婚のことを話してみましたが、私の馬鹿がする輕薄(けいはく)なすべては、二人の間を暗い穩かならぬものにしました。私の心には悲しいあきらめが絶えず密着(くつつ)いてゐるやうになりました。私の戀は何時も果敢ない涙に濡らされ勝ちになりました。一瞬の觀樂にも、ふと電光(いなづま)のやうな蔭影が掠めずにはゐなくなつて來たのです。——ですが彼は私を愛し、私は彼を戀してゐました。——二人の戀には初めから終りまで、滿足し合ふ物は一つもなかつたやうでした。戀する間の私のすべては彼の物であつても、最後は矢張り彼も全的に私を愛し得ませんでしたし、私が彼の全身心を自分の物にすることも出來なかつたのです。私のは初めから彼全部を自分に得られませんでした。それは、幾分彼に不純な點があつたからです。でも彼の常にいふところは、私を愛する上にやましいところはないといふ誇りだつたのです。

彼と私との戀、それは、この熱烈な想ひに比してあまりに脆氣なく果敢ないもので御座いました。わ

づか半年の戀、然も二人の間にある可成の隔りと障害が、頻繁に接しることを許しませんでした。他人や友の戀の上にまで心添えたり、不得要領な他所の戀に將來を案じ遣つたりしてゐました私たち二人が却つて自分たちの戀のあまりの果敢なさを、茫然と眺め合ふやうな次第でした。實は、二人は妥協をして戀を捨てたのです。私は彼のために、彼は私のために、美しい以前の愛情に戻らうと決心したのです。兄と慕ひ妹と愛すことに約束したのです。或友はその話をきゝまして、私たちの未練を悲しい同情から『あきらめておしまひなさい』と申しました。けれど、けれど、あゝ、私にはそんな思ひ切りのよい事は出來ないので御座います。私の彼に對する愛をもぎ取られるのは、一種の自殺に他なりません。あんまり慘酷な話なのです。それでなくてさへ、甘い母親の乳房を含んでまだ二口三口吸つたか吸はぬ間に、無理に他の大きい手に抱き取られて泣く赤坊と同じやうな形式の、無慈悲な別れ樣を二人はしたので御座いますもの。話し合ひとは云へ、前々から斯うなるべきものとの覺悟があつたとは云へ、私には淋しくやるせないなりゆきでありました。

――(此所まで書きます内に、非常に昂奮して參りました。此の先どんな突入つたことを書くか知れないといふ恐れがあります。あなたへそれはあまりに無遠慮な仕業のやうに思ひます。然し、あなたの眞實を確め、それを信じて、今迄曾て親しい一人の友にも明し得なかつたことまで、お明しすることを容して頂きます。その上に私の罪深いことを堪へていたゞきたいのです。)――

彼は將來に於ける責任と、現在の苦痛を抱き、私は寂寞と悲哀を持つて、今は頻繁に行き會ふことも出來ない窮屈な所に、互ひに拘束され合つてをります。私は今彼の心が何れに向つて行かうが、どのやうに變らうが、彼の幸福を祈り、彼を愛してゐたいのです。まだ中々に未來の多い彼のために、

只管無形の心盡しをして行かねばならないので御座います。近々に來る彼の結婚の日を、殊更一日も早くと希ひ、それに向つて赤心から祝福し、彼を喜ばせ彼を安逸な生活に送つて上げたいので御座います。私の祝する一言は彼のために、第一の贈物です。私が何時までも悲しんでゐれば、彼の結婚は少しの幸福ももたらさないでありませう。私は彼の幸福の永かれと神に祈りを込めるのです。私の生涯が哀れなものであらうと、慘なものであらうと、彼のために生き彼のために死するなら、それで私の生は充分に意義あることゝ考へてゐるのです。彼のために、彼のために……彼が私にとつて仇敵であらうが、若しくは惡魔であらうが、私の彼を想ふ精神の上には、何等の打撃を與へるものではないので御座います。——彼の犧牲になる——それが本望なのです。あゝ、私は彼を愛してゐます。彼の手に殺されたいのです。

此の私は、要り彼を惡く愛してゐるのかも知れないのです。この執拗な愛が、時には彼を苦しめて、私から離れようと心掛ける場合が、彼にないとも限りません。私は狂人のやうに彼を愛してゐるんですから。(萬一彼が私に死ねとでも云つた時に、あなたは私がどうするとお思ひですか。私は矢張り彼のいふ通りに死ぬに定つてゐます。)それほど、あなたの前で一生懸命に告白するほど、私は私の愛人を思ひ込んでゐるのでした。

あゝ、あなたはこゝまでをどんなお心でお讀み下さいましたでせう。お顔も被はずに此の文字を拾ひ拾ひ讀んで下さるとは、よもや私には考へられません。どうぞ赦して下さい。そしてお心を取直して下さい。何も彼も諦めてお捨てなすつて下さい。私はその以上を申上げやうが御座いませんのです。矢張りあなたは私にとつて親しい力强い友であつて下さつた方が好いのです。私はあなたを僞ること

は出來ません。えゝもうあなたの前に不純な自分を飾つてゐることが苦しいのです。あなたもあなたの此の戀を揉消して了つて下さい。あなたの前途にはお焦りなくとも、どのやうにか好い戀が待ち構へてをりませうものを。

私は必ず〳〵口先だけで、あなたのお惱みをお察しするとは申上げませぬ。そんな情無しでは御座いません。同じ苦痛は私にもある。決して〳〵無下なう拒むとお恨らみ下さいますな。私如き女にためにも、暫しも御自身をばお忘れ遊ばしますな。それは私にも責任があり辛いことで御座います。そんな度に、私は闇々罪惡を深う感じて行きます。何時純に立ち返れるか計られぬことで御座います。然し、知らぬ女にもあなたを苦痛煩悶の淵へお落ししたことを赦して下さいまし。どのやうにもお詫び致しませう。

此の前の手紙、（即ち、あなたのあのお手紙をいたゞきましてから、何ういふわけとも云はず、只わけを書いたらあなたが一層失望なさらうと杞憂して、）遂薄情らしく簡單な御返辭を差上げました朝、前の夜にいろ〳〵と考へて、あのお手紙を見た時間から距離が遠ざかるほど、私の心は稍不安に襲はれて參りました。そして一度見た限りのお手紙を二度繰り返して見るのが、甚だしい苦痛になつて來たのです。お手紙を仕末つてをいた本箱に手を掛ける度に、思はずハッとしては飛び退く位でした。午後になつて漸つと怖いやうなうら悲しいやうな心で、本箱から取り出し、またあれを拜見致しました。考へ盡して書くまでに二時間もかゝり、初めてあれだけの文句を認めたのでした。初めはいつそ御返事を出すまいかと思ひました。わけをお話しすると書いておきましたが、そのわけもいつそお話するのを止めやうかとも思ひました。だが、時を待つて下さいと私から申上げておいて、その時が待ち切

れず、追かけこの手紙を書いて見た次第です。この手紙の初めにも、わけをきかずに、此の戀を揉消して下さるやうにとお頼みしましたが、矢張り私は潔く告白して了つたのです。それは初めのお約束でもあり、こうしたことをお明しして了はねば、この一事の解決もつかず、物は徹底しないやうで御座いますから。戀にしろ愛にしろ、不純なものは決して望ましくはありますまい。誰にしても……。あなたもさうでいらつしやるでせう。私だつて、又私の彼にしたところで、二心や三心と感情を分つのは不快なことで御座います。何の恨みもなく妬情もない情愛を、より良く得たいのです。私が彼に對する一途の戀の他に、あなたのお心をも受け入れることは悲しく難しいことだと思ひます。あなたもこんな、私を戀することはおあきらめなさいまし。そして不純な分子の含まれない、より以上に美しい友達としてのお交りを、永久に續けていたゞきたう存じます。實は考へる程、意外に思はれるのです。よもやあなたが私を戀していらつしやらうとは、いまだに信じられませぬ。そしてそれが可成（かなり）唐突の事のやうに考へられてなりません。何故といふと、あなたとお目にかゝつたのは、まだ五度か六度を越しませんからです。これを若し私一流の皮肉から、外觀的に批評しましたら、ちと早すぎるやうな氣もするのです。

私を憎まずにゐて下さい。私は頼みに思ふ友の一人でも失ふことを悲しみます。あなたは矢張り私の友であつて、靜にお話の出來る力強い友であつて下さいまし。今のあなたのお親切に報ひることは出來なくも、どんなにか報ひなければならない非常な場合もあるのですから。今度お目にかゝりましても、私は決してあなたに此の事は申上げません。默つてをりますあなたも忘れていらつしやい。何も仰有らない方が宜う御座います。あのお手紙も私は灰にして了ひます。すべて形のなかつた昔に戻して了ふ方が快う御座います。ひとへに御自愛遊ばしますやう。

雨上りの夕暮れ、一昨日秋立つたばかりに、早や蜩が物哀れに鳴いております。――五、八、九――

ふたつの胸

生田花世

『これで私は本當の自分になつた……』

其の日新聞社を罷めた田代子は白く乾いたアスファルトの街路に出て、二三間遠ざかつて振返つて、街路樹の柳の新芽の枝がそよと靡く、三階の白い建物を凝つと見詰めて瞭然とかう思つた。

『六ケ月と云ふ長い間此處で働いてゐた……』

退社したいと思ふ考、こんな仕事が自分には不似合だといふ積りは二ケ月も以前から、いや、入社した其の當時からもう漠然とした形を取つて、心の隅をばいつでも隈どつてゐたのである、だが今までも居たのは其の自然な機會に到來しなかつたからの事で執着のあつた譯ではなかつた、自然の機會を待つてゐたのは入社の工合が何事にでも動じ易い自分の神經に靜かな重石となつてゐたからであると彼女は思つた。

それは秋の曇つた夕暮であつた。Cと呼ぶ彼女の先輩の女友が小さな門を入つて來て座敷にも上らないで話をした。

『おすすめする譯ではないのですよ。けれど若ししたいと思ふなら今日すぐ社の方にさう云はなき

やいけないの。明後日の社員會議までに缺員がないやうにしなきやならんのですつて……』

Cが歸つてから田代子は圖書館から歸つて來た郁次に相談をした。郁次は蒼白い顏に氣遣ふやうな表情をたゝへて云つた。

『勤まればいゝが。まあせいぜい二三ケ月位だらう。僕はどうでもいゝ。好きにしたらいゝだらう』

『好きに?、ぢやあね、私二三ケ月でもいゝ、其の間あなたが休息して下さるといゝわ』

『あゝ』

其の翌日の朝、田代子はCの先輩であるそして社の婦人部長であるM氏に逢つて、午後には白い三階建の扉を開いて入つたのである。

然し愈々退社しようとする行爲は自然に成されて來たのである。それは丁度水と油が別々に分れるやうになつたのである。彼女と殆んど同時に入社した須原と呼ぶ若い女、――相識の間柄ではなかつたし、話の合ふと云ふ譯でもなかつた――が、二日前に突然、それは全く須原に取つては恐しい突然であつたらしい、退社するやうにといふ勸告を受けた。

『私ね、本當にお話にもならん詰まらぬ事をして、今日きり罷める事になりましたわ。私はもつと勤めたかつたのですけれど』

須原は田代子を小さな應接室に呼び出してその皮膚のざら〳〵した白い顏に手巾を當てゝ、小さな眼からほろ〳〵と溢れる涙を抑へながら云つた。須原は訪問し易い社の名刺を使つて、內職の他の雜誌社の訪問の原稿をこしらへたり、其の受持の仕事だつた貴婦人や新郞新婦の寫眞を集めるのに、本人の名を間違へたり、又同じ寫眞を他に流用したりしてもう幾度も婦人部長の叱嘖を受けてゐたので

ある。或る時はまだ女學生である花嫁と揃へて出す花婿の寫眞を其の友達から借りて來た。二人並んで撮つたのをこれが花婿です。かういつて其の友達が戯れて自分の顔を敎へたのを其の儘疑ひもせずそのやうにして、思はぬ人違ひに花嫁を泣かしたやうな事もあつた。今度愈々出す事となつたのも、社としてはよく〳〵の事らしい。田代子は、失望と負け惜しみの笑と涙がヒステリカルに錯雜する荒れた須原の顔を自分も眼をうるませて見た。殆んど性格と見てもよい其の粗忽と無責任、それにまた淺薄な商略が自ら此の結果を招いたのである。須原もそれを自分の行爲の悲しい罰だとは思ふのであつた。それが一層逃がした職務に對する大きい未練となるので、

『これから私どんなに働いたつて、是までの收入は一寸得られませんわ』

と云つて須原は少し赤い顔をした。田代子は始めから分り切つてた事で、仕方がないと思ひ〳〵須原と一緒に應接室を出て呟いた。

『私だつてなか〳〵勤まりません。間もなく止めるでせう』

『まあ、あなたにはそんな事があるものですか。此れ迄お勤めなすつたのですもの、もう不安はありませんわ。私は駄目ですわ。本當に詰まらん事をして。でもどうか今後もお見捨てなく……ね』

かう云つて須原は澤山の人々に涙で汚く濡れた眼を見られるのを恥ぢて、俯向いて階段を降りて便所の方に行つた。

田代子は一人編輯室に入つて婦人部の一席の隅にたつた獨りとぼりと坐つてゐなければならない座席に就いた。と、脊中を向けてゐた部長は目敏い白い眼を投げた。

『須原さんに何を聞いたんです？……』

田代子は急調なかうした訊問にはいつも胸をどんと叩かれでもするやうに當惑して直ぐと返事の言葉の見付からないのが癖であつた。鈍い間に合はない田代子はこんな事からもこんな敏捷を貴ぶ職務に不適當であると自分で思ふのであつた。又M氏は特にそれを痛切に告げるやうな素振りをしたり、時には見るに堪へぬといつたやうな顏をした。

『私が何も聞かうとした譯ではございませんが……』

厚い唇を開いて重苦しく彼女が話し續けようとした。M氏はこんな事が五月蠅いのであつた。こんな時にはすつかり苛々して了ふ。實際そんな事なんか聞くひまはないのだ。叩き伏せるやうな嚴しい聲で云つた、

『なに、宜いのです』

そして向方の席の見馴れた人の顏に苦笑を寄せながら打棄るやうに云つた。

『須原は罷めたんだッ……』

田代子は胸かぴり〳〵と裂けるやうな感じがした。そしてなさけないなさけない氣持となつた。口を閉ぢて離れたところの自分の席に腰をかけて二つ三つ涙を十六字詰の原稿紙の二行目に落した。その涙の上に尖つた鉛筆を刺してぐる〳〵と輪ばかり描きながら、仕方のない成行だと思つた。そして次には罷めようと思つたのである。

電話をかけても四國訛りの彼女の聲は間が拔けてゐた。訪問にはいつでも遲い事が多かつた。長い間消したり直したりして書いた原稿は要領を得なかつたり、研究的で面白くなかつたり、殊にそれには性格的に來る不注意、誤謬、非常識な點が至るところにあつたので、M氏はそれの添削に閉口しな

ければならなかつた。名高い女子敎育家HI氏を訪問して歸つて書いた原稿が間違つてゐたと云つてHI氏はもう今後婦人部の記者には決して談話しないと云つてゐたと社會部の若い記者が田代子の顏をぢろ〳〵見ながら人々に話しをした。そんなにも私は間違つたのか。田代子はかう驚いて其の人の瀟洒な姿を見詰めた事もある。こんな遲鈍な田代子と、失策と素行上から非難される須原とは、平凡な同病を憫れみ合つて、二人は銀座にある社を出て、京橋、日本橋、神田と話し合つて歩いた事は度々である。そして繰り返す事は一つであつた。

『何時、私達は一人前の記者になれるのでせうね。何時私達の原稿が面白いと云はれるやうになるのでせう』

唯こればかりを何十篇も違つた言葉で云ふ中に神保町までいつしか來て二人は別れる。こんなに互に無能を悲しみ合つてゐた一人の退社は田代子の心をも動かして來た。

翌日社に出ると須原の席にはもう若い脊の高い、眼鼻立の整つた、華奢(はで)な着物を着た女が代りに着席してゐた。田代子は不圖思つた。

『新聞社つてものは新しい人と、どん〳〵代ればいゝんだ。氣の利いた賑かな如才のない筆の達者な人でなきや駄目なのだ。私が新聞記者か。こんな可笑しい事はない………』

そして獨りにこにことした。

その翌々日田代子は婦人部長から、女學校の優等卒業生の寫眞を貰つて來るやうにと云ふ命を受けた。それは辭意を胸に持つた彼女にはこれが最後の仕事のやうな氣持がした。

田代子は編輯室の入口で、Cを階下の應接室に來て吳れるやうにと小使に賴んで階段の中程でCを

待つた。これからの訪問に必要なこざつぱりした春着を新調しなければならないのも彼女には臆劫であつた。又自分に全然この職務が取れないといふ自覺は一層本氣になつてする仕事、無駄な苦勞をしない方へと思はせるのであつた。罷めても差しあたり、一寸した小遣の取れる位の家でする仕事はあるのである。それに。と田代子は思つた。家では郁次が此の頃何となく苛立たしい日を送つてゐる。それは何か大切な仕事を企てゝゐるのであらう、生き生きした生活をしようとしてゐるのだ。もうあの人の傍で一日ぢつとあの人の傾向を見よう。あの人が何かする、其の手傳がしたくなつた。それに自分としても創作の準備をする、これこそ第一番のいゝ生活だ。それに春が來てゐる、温かくつて、葉が氣持よくぐん〱と伸び上り、花が開く、着物を一枚々々脱いでさつぱりする四月が來てゐる。凝つとしてゐられない四月だ。

『止める方が社の爲め、また自分の爲だ』と彼女は呟いた。

此の時Cが降りて來た、Cの怜悧な緻密な丸顔は嚴かな場に出るやうな用心の表情で固くなつて見えた。姉の樣な氣持を與へるいつもの柔かな眼は睫の下に暗く据はつてゐた。やがて、椅子に向ひ合つて、田代子が、退職したいと云ふ事を、詳しい事情とともに打開けると、Cは患者に對する女醫のやうな周到な觀察の眼をそゝいで、須原の退社の爲に脅迫觀念を得たのではないかと思つたらしい。須原は社として許しがたい失策があつたさうですと云ひかけた。けれども田代子は潤んでぎら〱する眼をした。

『私がこの仕事に不適任で段々働けなくなつていくのは、あなたも御覽のとほりでせう。それにまた頃は、私は、家で仕事をして、良人の生活と一緒にならなければならぬ事情になつて來ましたから

……お止めにならないで下さい。須原さんの爲に心が誘はれたんぢやありませんわ。原因はもつと種々の方面から集つて來てゐます。退めなければ、私は段々苦しんで硬張つて棒立ちしちまふでせうもの、ねえ』

默つて聞いてゐたCは、うなづいて、それでは、あなたの要求なさるやうにと云つた。あなたを連れ出して來て、恐しい鐵拳の下に置いたやうな氣がします。もし六ケ月間の新聞社での生活があなたの一生に消す事の出來ない不幸、不利益であつたとしても私を恕して呉れるやうにと、Cは自分の責任に對して悔悟するやうな嚴肅な事を附け加へた。

『そんな事のあり樣筈はありません。こゝでの六ケ月は經驗の爲めにも、亦私の經濟の爲めにも非常に有望でありましたもの、然し、今退めなければ、これから先續ければ、これから先の記者生活こそ不幸、不利益ですわ。ですから私に止めさして下さい』

Cは苦笑しながらも賴母しい態度にかへつて承諾した。そして退めなさるのがいゝのですよ。私も長く居ようとは思つてゐませんの、ですが、私は、あなたのやうに自分の生活の要求から自分が退めると云ふ樣によう出ないで、いつまでも、何處にでも、入つて凝つと居られる自分の生溫るいのが歯搔いといふやうな事を云つたりした。

田代子が、三時間程して、まだ時の早い爲めに優等生等も定つてゐないので、一枚の寫眞をも持たずに社に歸つて來た時、婦人席の自分の机や椅子はもう舊態の樣になかつた。十脚ばかりの机はすつかり置き場所が改められてゐたのである。田代子は絶望したやうな喪神を感じた。Cは眼で田代子を呼んで、田代子が二日前Sに別れた同じ應接室で都合よく運んだ事を告げた。

『須原さんとは違つて、あなたには何の過失もないのですから當方では何にも申す事はない。家庭の御事情からならおやめになつてもよろしい。今月分の俸給は全部さしあげる事、また外交手當も本當は出ないのですが、それもさし上げられるさうです……、今からでもお歸りになつていゝのですよ』

とCは優しく云つた。田代子はほつとして重荷をおろしたやうな氣輕さを感じて、思はず手足を動かして見た。彼女はかうして、六箇月目に社の大きい扉を押して職を放れた婦人となつて、街樹の靑く立つ街路に出たのであつた。

振返ると三階建の社の長方形のいくつもの窓は春風を飲んでゐる。其の中の騷音は聞えないが人々の忙しさうな姿は彼女の心に映つて來る。流石に懷かしい思ひに打たれながら矢張凝つと見上げた。

『銀座ももう暫くは歩かないだらう……』

田代子は激しい物價の騰貴のあつた頃、化粧品や、金物や、雜貨等の値上げの模樣を、街路の兩側の商店を聞いて廻つた、滑稽な自分の姿の記憶に笑はされたり、時間を待ち合はす爲に入つた綺麗な平家建のカッフェーや、横町の西洋料理を覗いたり、五彩の靡く吳服店や、高價な寶石入りの指環が、一杯並べられてゐる飾窓を見惚れたりして、街樹の影の淡く敷石の上に染む步道を電車交叉點の方に近づいて行つた。

魯鈍な、缺陷のある自分のやうなものが、六箇月もゐられたのはと彼女は思つた。彼女は自分の値打を引下げはしても高く値ぶみをしてはならないと思つてゐる。けれども此處では高く買はれてゐた、それはCやまたCの先輩である婦人部長の計る事の出來ない好意である事を思ふと彼女は嬉しい心持

になつた。一體私は幸運なのだと田代子は、氣輕い心で思つたりした。おもちやの金太郎、大正琴の十字屋、パンの木村屋、銀座の角の倉庫のやうな服部時計店、そんなものが、自分にむいて皆さやうならと云ふ姿をしてゐるやうに思はれた。

六時頃にしか歸れなかつた銀座を今日は四時と云ふ明るさに歩いてゐる。十字路に立つて左の方を見ると、歌舞伎座の甍が見えるのだつた。一幕見をして見たいやうな浮き／＼した氣持もしたが田代子は凝つと立つて考へてゐる中に赤坂の田町に行かうと氣がついてカフエーライオンの前に出ていつて青山行を待つた。やがて青山行の電車が、繁華な町から段々閑靜な内濠を廻つて見附の方に走つてゆく車の中で、田代子は、社の騷音も、Cの言葉も、席のなくなつてゐた絶望も、銀座の美しい色彩も打忘れて、ぼつかりした輕い心持で、車内廣告の樣々に意匠をこらした藥や、文房具や、化粧品や、活動寫眞等の畫を眺めた。

田代子がこれから訪ねる田町は田代子が昨日まで、いつも夜の七時に英語を習ひに行つてゐた家である。伊田と云ふその家では、英語ばかりではない、獨逸語もスペイン語も敎へてゐたし、細君は、ピアノを熱心に稽古する側ら、先生の敎授の手傳をしてゐた。二人とも大きい體軀をした似合の夫婦で、長い間米國の桑港でゐたのである。二人の間に子供はなかつたが、貰つて育てゝゐる子供が、三人あつた。一人は女の子で、どの子供ももう學校に通ふ位大きかつた。

電車を降りてから七八丁歩いて曲つたところに伊田の軒燈が丸い白い色をして門の上に突き出てゐた。田代子は玄關の砂利をきしめかせて入つて行つた。

『おたかさん。一寸讀んで上げて下さいな。田代子さんがお待遠うだらうから……』
先生の廣額をふさふさと圍むやゝ白くなりかけた長い髮の毛は米國と日本の風に吹かれて老けたものである。淺黑い大きな顏の持主である伊田先生は細君に聞えるやうにかう云つて愛相笑の一瞥を田代子に投げて、會社員かとも思はれるもう可成りの年輩の青年に、專門的な口譯をしてゐた。田代子は側で、二十分も默つて待つてゐたのである。
夫人の居間の扉が開かれて、丈も高く、肥つてもゐる大きいたか子が顏を出して田代子を呼んだ。
『ねえ、私の方へお出でなさいよ』
夫人の後から部室――室の三分通りは大きいピアノに塞がれ、一面の壁には洋書ばかりの書棚が設けられ、青い段通を敷いた床上に、圓卓が三脚の椅子とともに並んで、街路に向いた白い窓カアテンから透つて來る光線は、幾つとなく吊り下げてゐる油繪や、石版畫の小さな額に薄すら匂つてゐた。
――に入つて椅子に腰をかけた。夫人はそれまでピアノを彈いてゐたやうに思はれる。
『お彈きになつてゐらしたのでせう。お邪魔ね……』
『いゝえ、もう濟んでましたわ』
夫人の先生にも劣らぬ大きな淺黑い、筋肉の溢れるやうに見える肥つた顏は、その高くて廣い肩とともに少しく振られながら、厭味のない愛相笑を見せた。田代子はこの夫人の體軀が見る每に羨ましかつた。矢張この伊田に英語を折々調べに來てゐたR――女史がこの夫人を健康のシムボルと云つた事がいつも思ひ出されるのだつた。貧弱な身體を恥ぢる彼女は、かうした豐富な肉體の所有者は尊敬せずにはゐられないといつも思ふのである。

夫人は婦人の問題に就いていつも考へたり書いたりするR女史の友達の一人であつたのである。で、田代子は直ぐとは稽古の頁を開かないで、そんな雜談をはじめてゐたが、社を止めた事も話す必要にせまられた。

『私………』と云ひだして、夫人の顏に目を据ゑてそれが本當に小事件で、あつた事を眼ませしながら、『社を今日止める事にしましたわ』と云ひ續けて、さうするのが自分の一番よい選ぶべき道であつた所以を述べた。

『まあ………さをですか、結構ですわ』

夫人は同意するやうに大きくうなづいた。

『ぢや、これからはお暇でせう。晝間のうちにいらつしやいね、九時頃に、そして私達と一緒におなりなさいな。ウオードのものをしてゐますから』

田代子はこの話の間に、二三日前こゝで逢つたO――氏の夫人の事が頭に浮んだ。そして、その夫人が艱難の間にもはなれず、愛してゐた夫から、家庭が厭になつたから、別々にならうと云はれて、悲しい悲しい破られた心を抱いて此の家に相談をして來た事や伊田先生がO――氏に對する激しい不滿と、夫人に對する同情とから自分の弟の持つてゐる家に夫人の住まうやうに世話したといふ事を、聞いてゐたのを思ひ出した。

『O――さんはお出でになりましたが、矢張奥樣がお一人で………』

『いゝえ、奥樣お一人のお話でしたが、まだO――さんがお出でになるやうですよ』

と夫人は外事のやうに云つた。田代子は又そのO――氏か文學者のN――女史と新しい相愛生活を

ことを聞いてゐるのですが、まつたくでございませうか』

『もう、そんなに皆んなが知つて居りますか私も確實に知つてる譯ではありません……』

田代子の心には不安と好奇心とが交流した。夫人は答へに躊躇する顔をして見せたが。

と云つたが矢張、同じやうに個人生活遂行者の攪亂から受ける苦痛の情に打たれてゐる。

『お父さんは——夫人は良人をいつもかう呼んでゐるのである——怒つてゐるのですよ。Oさんがこんな事をしようとは思はなかつたと申しましてね。善良な婦人を虐待して神聖な愛を蹂躙するやうな人は不可ないと申しましてね。お父様はいつもかういふんですよ。どんなに才能のない人でも愛を大切にする人ならば、貞潔な人ならば本當に尊敬して、胸襟を開いて交はる事が出來る、けれどもどんなに怜悧な才能のある人でも愛を嚴肅に奉じないやうな人は厭だと云つて……。本當にお父さんは嚴格な愛の讃美者なのですよ。N——さんも今までの同棲が親にきめられたとか、又無自覺であつたとかならば、今度こそ本當の愛を感じたと云ふ事もあるでせうが……夫婦の間の愛はさういつまでも結婚當座のやうな狀態が續くものぢやありませんわ。どうせ不平も出るし厭な事もありませうよ。けれどそれを愛が無くなつたのだとは云はれません。まあ愛が眠るのですわ。誰れだつてさうでせう。私はまだ時々考へ方が横着でいけないんですよ。けどもお父様の至愛主義は本當に嚴格です……聞いてるとどうしてもそれが當然だと思はずにはゐられません』

と夫人は自分の夫に對する激しい尊敬と愛に氣が附いて語を結んだ。二人は頁を開いた。すると暫くたつてからであつた。

『おたかさん、こちらはもうすみましたよ』

と云つて伊田先生が部屋に入つて來た。

田代子が歸りに就いたのはもう七時にも近い頃であつた。柔らかな宵闇の中に街路燈が穩かな光を投げてゐた。電車に歩いて行く道々彼女は興奮した心で思つた。N――女史、O――氏と同棲するといふ年若い奔馬のやうな感じを彼女に與へてゐたN――女史と僅か三十日ばかり前の朝、小石川の植物園でひよつくり出逢つたのを想ひ出した。N――女史はT――氏と一緒に歩いてゐた。其の時の二人の陰慘な後姿はもう其の當時でも彼女の心にある不安を描かせた。彼女は二人がまだ薄暗い早春の芝の上を思ひ思ひの顔附をして、N――女史は宛も嵐の前の暗い空の樣に、T――氏は靜かによどんで動かぬ沼の水の樣に疲れた風情をして歩いてゐたのを見て、此の二人はもう植物園の門前で思ひ思ひに別れて了ふのではないかと思はずにはゐられない心地がしたのである。其の時N――女史は大きな丸髷に結つて、小さな男の子を脊負つてゐた。

二人は田代子を見て近寄つて來た。

『伊田さんの家で借りてゐた書物をあなたに持つて行つていたゞかうと思つて』

とT――氏は言つた。語尾ははつきりと聞えなかつた。N女史は後の方に離れて暗い顔をして口を歪めて强いて笑ふやうにしてゐた。そして何にも言はないで、またT――氏と並んで植物園の横手の道をのろ〳〵と上つて行つた。

『あんな暗い顔をして二人で朝の散歩をしてゐた。あの時二人はものも言はなかつたのであらう…

……あの時はもうN――女史の心はT――氏からも二人の幼い子供達からも離れて、遙かな前途に目を注いでゐたのであらう。自分の最も生き甲斐のある生活を望んで苛立つてゐたのであらう、しかもT――氏はそれを知らなかつたか』

田代子は二人の其の當時の心持を猶深く考へて見る中に、おのづと自分の生活を思ふやうになつた。彼女は未婚の間、貧しい慘めな生活をして、悲しい片戀や、性の陷穽の錯雜した日を送つた。今は年若い郁次と一緒に穩かな日を暮らしてはゐた。彼女は家を作る時、『永久』といふ言葉を擧げて愛の誓をした。長い現實生活の間にも彼女の心はまだ詩人の心であつたからである。其の後幸福な――それは安眠のやうな――二年といふ月日が束の間のやうに過ぎた。そして此頃はもう二人の間には胸の燃えるやうな感情は燒け切れて、思ひ思ひな傾向となつてゐた。郁次は閉ぢ籠つて書籍にのみ耽つて口を開く事は稀である。彼女は折々苦しい『寂寞』の情に泣く事があつた。私達もどんな事となるか。かう思つて彼女は近寄つて來る電車の灯を曇つた眼で見てゐた。

『けれどしつかりと愛の最初の狀態を維持して少しでも離れないやうに長く穩かに暮らす樣にしたい、私達の間の性愛は失せてゆくとしても哀憐は益々濃くなつて行くのだと思ふ』

電車に乘つてから彼女の心は家を思つていら／＼した。眼にははつきりと良人の机にむいてゐる姿を映した。私は何と云はう。社を止めた事も云はう。伊田先生の意見も云はうN――女史の噂も話しよう。今日はあまり事の多い日であつた。疲れて頭も痛い。かう思つて田代子は電車を降りて急いで夜の町を歩いた。

二階家の蔭にある小さな燐寸箱のやうな彼女の家の戸は開かれて障子に淡黄いろい光が漲つてゐ

た。下駄を下駄箱に、洋傘を柱にかけて部屋に入ると郁次は青白い神經質な顏をあげて彼女を見た。

『私達はまだ別れませんか』

『何を言つてゐるのだ？』

『いゝえ。何でもありません』

『變つた事はなかつたか』

『ありましたの、私、社を退めて歸りましたわ。もう以前からあなたにさう云つてあつたのですものね』

『下手な退め方をしたんだらう？』

『いゝえ、都合よく、Cさんに種々よくして頂けたのです。自分も亦誰にも少しも厭な感じをのこさないで引上げましたの、それで私ぶら〳〵と銀座を歩いたり伊田先生の家へ行つたり……それからは又私、あなたのお手傳をさせて下さい』

『それがいゝだらう』

彼女は立上つて臺所に屈んだ。そして脊伸びをしたり欠伸をしたりしてどれ程女主人の歸りを待つてゐたかさ告げ顏の白い小猫に鰹節をかいたり、其の柔い毛を撫でたりした。

『あゝ、家はいゝのね。明日から一日靜かに家に私はゐられるから嬉しい、嬉しい。あなたね、私が今まで働いてあなたは休息してゐたでせう。これからは私の休息なのです』

『あゝ』

其のうちに夜は靜かにふけていつた。そしてふたつの胸は穩かに鼓動をした。

追憶の影

山田たづ

優子はふと疲れた重い瞼を開けた。もう日は高く登つて居た。何時の間にか雨戸はすつかり開放されてあつて、眞夏の熟れ切つたやうな強い朝日は枕許の青蚊帳の裾迄這ひ寄つて居た。

優子は何となくがつかりしたやうな、それで居て心の底迄もゆつたりとほぐれて居るやうな寛いだ氣持で、まだ眞新しい染色の匂ひのする萠黄蚊帳の荒い麻の目越しに、部屋の中をそつと靜かに見廻した。總ては去歳の儘である、床にある古びた掛軸、其前にある青銅の花瓶、青貝を瓢形に嵌めた蒔繪の象眼の花臺、違ひ棚の金唐皮の手文庫、柱に凭せ掛けたメリンスの袋に入つた琴、それ等のいろんな調度が何れもひそ〳〵と自分に優しい聲を掛けて呉れるやうである。

『蜆よい、殼のよいのえ―い、み―蜆よ―い』と、表の通りを瀬田の女の蜆賣が甲高い聲を張り上げて行く。

『お花入りまへんか、花入りまへんか』と、滑かな訛のある聲で花賣女が喚び歩いて行く。優子は赤い襟を掛けた紺木綿の繻袢に、これも同じ黒つぽい三幅前掛を掛けた鄙びた優しい少女の姿を眼に泛べながら、『あゝ、郷里へ歸つて來たのだな！』と、泌々としめやかな懷しい情緒が胸の中に込み上げ

て來るのを覺えたのであつた。
『姉さんはまだ寢てはるの』と、小さい弟の聲が聞える。
『汽車で疲れてはるさかい。』
『東京から此所迄何時間費るかしら、十三時間――十四時間？』
茶の間では朝飯が始まつてゐるらしく、斯んな話聲が卓の上に茶碗や箸の觸れる音に混つて聞えて來る。
『お優ちやん、最うお起きおしたか』と、母親が子供に言ふやうにして次の間の障子の處に立つて居た。優子が合財袋から平常着を取出して、寢衣をそれに着替へる間に母親は手早く蚊帳を疊みにかゝる。ばつと鮮やかな燃え立つやうな紅絹の縁が寢不足の眼を覺して吳れる、新しい麻の匂ひもすがすがしかつた。優子は皮膚に沁み入るやうな掘井戸の冷たい清水で顔を洗つてから、其處の縁に蹲んで茂つた庭の面を眺めて居た。連日の干照に青葉の色は殆ど灰色に近い黑ずんだ色をしてゐる。裏庭の木立では蟬が喧しく啼いて居た。
――と、不意に又頭の上で馬追蟲が一聲高く啼いた。優子が振仰いで見ると、恰度其處の廂の影には蟲籠が吊してあつて、靑い蟲が餌に貰つた瓜の上をピョン〳〵と威勢よく跳ねて居た。
『姉さん原へ行かう、そら昨日原で捕つて來たのや』と、其處に蹲んで土弄りをしながら白い麥稈帽を日に輝かせて居る小さな弟が眞黑な顔に眼ばかりくり〳〵させながら無邪氣に言つた。
『恭ちやんは夏になると瘦せるね、立つて御覽、まア身丈の高くなつたこと！』
小さな弟は久し振な姉の顔を面羞ゆさうに眺めながら、糸で結へた黃金蟲をぶん〳〵と空中に唸ら

せて居た。

『お優ちやん、お膳を此處へ持つて來まひやうか、それとも彼方へお出なはるか』と、母親が何時の間にか背後に立つて居た。

『其方で頂きますよ』と、優子は言ひ捨てた。生れた家を長い間見返りもしないでゐる自分に母親がお客扱ひをするのも彼女には何となく後めたい感じがするのであつた。

馴れてつる／＼と黄ろく鼈甲のやうに光つた藤筵の上に坐つて、優子は久しぶりな故郷の味を樂しみながら食卓に向つた。瑠璃色をした山科茄子にも、小指のやうに小さい京胡瓜の淺漬も、小皿に盛つた小鮎の佃煮にも、其何れにも懐しい追憶の食慾が走る。

『お晝飯には柳葉亭で鰻を取つて來て上げやう、今度京極の支店が電車の終點の處に出來たのえ、花家に居やはつた金さんの料理やさかい味も却々えゝわ』と、母親は傍で給仕をして呉れながら言つた。母親の鬢の毛にも二筋三筋白髮が混じるやうになつた。髷も小さくこつんと根の低い處に結つて居た。

優子は父親の亡き後の子供達を相手の母親の淋しい朝夕を思つて見た。氣の故か家の中も何だか火の消えたやうにひそやかであつた。

『金さんは花家を出たんですか』と、優子は言葉の接穗がなさにふとそんなことを訊いて見ながら、自分の家の貸家に住むで居て、彼女の幼ない頃には『孃さん、孃さん』と、可愛がつて呉れた其男のことを優子は思ひ出して居た。

『今の若夫婦と反りが合はんちうてな、何もそないに主人に逆らふこともないのに、あの男も頑固や

さかいな、あの人の積りでは自分の料理でなうては花家の店が立行かんやうに思ふてるのやけれど、なんのそんな老人よりも、今の若手で腕の達者なのが幾許もあるさかい。』

其金さんが、花家を罷めて柳葉亭へ行く迄の遊んで居た間に、大分家賃を滯らせたことだの、それからそんな小さな所は何だけれど、大きな貸家が幾つも空いて居て困るだの、電車が出來て、京大阪との交通が便利になつたので、土地に旅客が逗留しなくなつて、土地が激く不景氣だの、それがため土地が衰微して地價や、家屋が値が下がつたのだの、そんなこさ〴〵したことを老女の癖で繰り返し巻き返し同じことを並べたてた。

『ぢや京都は繁昌してるのでせうね』と、優子はそれに口を合せるやうにして言つた。

『いんえ、京も隨張不可へん、二條から上は空家だらけやは、京も矢張だん〴〵衰微の方やな、當地が不可んのは其加減もあるのや。』

優子は風通しの好い明るい八疊の間に、氣儘に身を持て扱ひながら、此處暫時何の煩ひもない日を身も心も延々と暮らさうと思つた。彼女は斯うしてのんびりと生れた家の馴染んだ部屋に寛いで、青葉の中の日に光つた白壁の文庫藏を見詰めてゐると、昨日の生活の續きが今日に及んで居るとは如何しても考へられない、何だか自分の心も身體も數年前に立歸つたやうな氣がする。表の格子戸ががらりと手荒く開く時なぞには外出して居る父親が歸つて來たのぢやないか知らなぞと思ふ。最う彼女の父親が亡くなつてからは數年になる、が、彼女は其亡くなつてから後の淋しい故郷の生活を知らない故に、ほんの瞬間の感じでは本當にそんなことを思ふ。

優子が歸省中に讀まうと思つて持つて歸つたいろんな新刊の書籍や雜誌やら、くさ〴〵の土產物だ

のを合財袋から取出して、座敷の中に一杯取散らかして居る處へ母親が冷した瓜を持つて來て呉れた。

『お母さんこれはつるに遣つて下さいな』と、優子は下婢への土產の中形の浴衣を散らかつた中から取出した。

『それからこれは恭ちやんに、これはお鈴さんに』なぞと末の弟への土產の伊東屋の組合せ文房具だの、親戚の女兒へのリボンだのを撰り分けて、其他これは近隣の何某へ、これは親戚の誰某へなぞと、皆一々上書きのしてある樣々な紙包を一つ〳〵疊の上に並べ出した。

『まア斯ないに好う買うて來となはつた』と、母親はいそ〳〵と悅んで、

『ほんなら、先きへこれを恭三やつるに持たして遣つとくさかい、貴方も一ぺん後で顏を出しとくなはいや』なぞと、優子の顏色を見ながら近隣や親戚の義理を考へたりした。

靜穩な、平凡な二三日が優子の上に過ぎた、彼女は心の底の底迄些の蟠りもなく解けてほぐれて居るやうな寬いだ氣持で、のんびりとした日を送つて居た。今の彼女には戀もなかつた、希望も名譽も何もなかつた、此儘此處の土と消えて仕舞つても憾みはないと思ふ程、何の欲求をも持たない安らかな心であつた。

或暑い日の午後のことであつた。優子は汗にじつとりなつた物憾い身體を持て扱つて、つと庭下駄を突掛けると、靑葉の中を橫切つて庭の突當りにある文庫藏へ這入つて行つた。日影の射さない土藏の中は流石にひいやりと濕つぽかつた。埃を被つたいろんな道具類、亡父の記念の蝕ばんだ漢籍類の黴臭い香も故郷の匂ひであつた。

優子が此處へ這入つて來たのは或手紙を搜すためであつた。併し其手紙が此處に藏はれてあるものか如何かは彼女にも判らない、それは母親に訊けば直ぐ判るのであるが、彼女は今更そんなことも訊き兼ねた。彼女は何の當度もなく暗闇に物を搜るやうな形で這入つて來たのであつた。優子は其手紙の主と別れたのであつた。いろんな義理を缺いて迄も其人と別れるやうにしたのであつた。そして都に遁れて仕舞つたのであつた。それからは最う數年になる、が、優子はさうしてから何となく其人を懷しく思ふことがあつた。優子の追憶の影には何時も其人が生々しく生きて居た。が、優子は其人と終始を共にしたら或は其人をそんなに思はなかつたかも知れないと思ふ。――それは彼女の許婚の人なのであつた。優子は幼ない頃には好く其人に泣かされた、恰度優子が尋常小學の三四年であつた頃高等科に居た其男の兒は好く他の友達と一緒に學校歸りの彼女を虐めて泣かせたものであつた。『マリーさん混血兒、混血兒!』なぞと彼女を嘲弄つて囃し立てたりした。それは優子の顏立が眉と眼の間が狹くつて、頰が林檎のやうにくりくりしてゐて何處か西洋人に似た處があつたからで、それに其頃の商業學校の英語の敎師である英國人の娘に似て居ると云ふ意味なのであつた。

優子は埃つぽい道具の中を彼方此方と避けて步き廻りながら、殆ど其邊にある函と云ふ函は皆取出して開けて見た、がそれらしい似たものゝ影も見えない、が、優子には斯う云ふことをするのも、何となく當度もない人を搜し求めるやうな、それと同じローマンチックな興味にそゝられるのであつた。其間に優子は不圖其處の棚の上の、會席膳十人前、文化―年なぞと誰が書いたのであらうか、曾祖父か、それとも最つと先きの先祖が書いたのか墨の色も木地の色も變らないやうに古びた箱の上に載つた眞白に埃を被つた黑塗の手文庫に眼が着いた。彼女は何物かを直覺したやうなときめいた氣持で

急いでそれを開いて見た。が、直ぐさ輕い失望が胸に突き上つた。中には古寫眞が一杯這入つて居たのであつた。其處には彼女の過去のいろんな世界が開けて居る、頭を短かく切つたおかつぱにして、眉を剃つて、友禪の長い袖に市松人形を抱へた町家風な女兒の寫眞、それは彼女の六つの時のであつた。それから稚兒輪に結つた十歳の時の寫眞、最一つ古いのでは紋羽二重の曙染の振袖の裾模樣を着て頭を桃割れに結つた十三の時、これは土地の風習で十三參りに嵯峨の虚空藏さんへ參つた時の記念であつた。それから年齡はずつと飛んで、最う彼女が十七八の妙齡になつてからばかりのになる、其間に彼女は不圖其重なつた中から濃い綠色の表紙がよれ／＼に汚なくなつた一枚を見出した、そして何だらうかと取上げて見た彼女の手に急に輕い戰慄が傳はつて來た、それは彼女が女學校を卒業した時の記念に寫したので、華美な矢絣の着物にカシミヤの袴をはいた姿のであつた、そしてそれは許嫁であつた其人に與へて置いた數ある中の一つで、其婚約が破れた時に先方から送り返して來たものなのであつた。海軍士官であつた其人が長い航海の徒然に衣囊から取出しては旅愁を慰めて居たのであらう――とは其當時の手紙に始終書いてあつた文句であつた――表紙も臺紙も見る影もなくぼろぼろに摺り切れて居た。彼女の胸にはつと或感情が、悔恨？とも何ともつかぬ或思ひが泌々と蠶が糸を吐くやうに胸の中に込み上げて來るのを覺えるのであつた。

彼女は自分で其人と別れるやうにしたのであつた、あらゆる義理や何かをも缺いて迄も左樣云ふやうにしたのであつた、が其當座の若い氣負つた後先の見えない心の中には只何の感じもなかつた、何の苦痛も感じなかつたのであつた。が、時は經つた、彼女の心からは淺薄な勝利と云ふやうな思ひは消えて、只あとに殘るのは悔恨？とでも云はうか何と云はうか矢張或一種の感情が殘つてゐた、彼女は

彼に與へた行爲の復讐を矢張自然に自身に受けて居るのであつた。

これは最う二三年も前の或寒い冬の夜のことであつた。彼女は不圖した用事で或海軍の將官の夫人を訪ねた。此夫人は優子が或舊友の紹介で會つた人であるが、此人の良人の將官には彼は親しく薫陶を受けて、そして大變其人を崇拜してゐるやうな言葉を以前彼から聞いて居たのであつた。彼女は枝洋燈の明るいタングステンの光りの中に、壁掛椅子の柔かい座褥の羽毛の中に身體を埋めて、暖かに燃えた暖爐を圍みながら愼しやかな夫人といろんな雜話を交はして居たのであつた。と、其處へ夫人に電話で、それは若い士官らしかつた。そして其人は今水交社にゐるのでこれから夫人を訪ねやうと云ふのであつた。夫人の若い者をいたはるやうな快活な聲は隣室の電話口から響いた。

『此お寒いのに、これから被入して下さらうなんて大變ですから今夜は最うお止し下さいませ、それともお泊りがけなら被入して下さいませ、なに左樣なすつて被坐しやれないのですつて、ぢや最う何卒お止し下さい。私のやうな者に敬意なんかお拂ひにならなくつても好う御座いますから』と、夫人は戲談を混へながら言つた。靜かな夜の中に夫人の判きりとした聲は玉のやうに澄んで聞えた。夫人の良人の將官は任地に居て、此方は留守宅なのであつた。優子は夫人の卒氣もない中にも何とも云へぬ優しい情味の含まれて居る言葉を床しく聞いて居たが、不圖彼がそんなにして此處へ訪ねて來たら――と思つた。と思ふと今の電話の主が何だか彼のやうな氣がしてならなくなつて來る、夫人が電話口で喚んだ名を聞き洩らしたが故に、何だか本當に左樣思へてならなくなつて來る、そんな偶然が世に有り得ないとは思へない――優子はそんなことを思ひながら暫時それから考へを轉ずることが出來なかつた。

『失禮しました』と、言ひながらやがて夫人は又元の席に着いた。そして寒いからと言つて溫い香煎を侑めたり何かしながら彼女をもてなした。

歸り際に、廣い玄關の衝立の影に立つて、夫人がコートを着せかけやうとするのを彼女は强ひて斷りながら不圖其處の卓の上にある名刺盆に眼を走らせて、もしや彼の名は見えないかと胸を騷がせたのであつた。此近い頃に此家へ訪ねて來はしなかつたらうかなぞとそんなことを無理ならず思つたのであつた。

——不圖優子は物思ひから離れると、じつとりと額に汗が滲(にじ)んで居るのを覺えたのであつた。彼女は此寫眞を如何仕末しやうかと思つた。捨てゝ仕舞はうか、それも可厭である、燒いて仕舞はうか——勿論可厭である、彼女は遂にそれを如何することも出來なくて、又そつと元の處に投げ入れた。そして忍ぶやうに土藏を出た。

最う庭は蔭ばんで、高い土塀の影あたりはひそやかに黃昏の色が動いて居た。上の弟が手ずさみに作つて居る花壇の夕咲の白い黃ろい花が愼しやかに微笑むやうに開いて來た。甘い花の香がする、土の匂ひがしめやかに皮膚に泌みる。

——大正五年八月廿一日——

春の丘

川路歌子

1

丘は一面崩えだしたばかりの綠の小草で包まれて、緩くうねりを續け、女の横腹のやうな線を畫いてゐる。

澄み切つた初春の空は碧くその表は心もち紫ばんで、暖く光つて、午後の日の光りに、小草の上に黄金色にキラキラ輝く。丘に續いたいくつもの起伏する屋根がむらさき色に、それが濃く薄く空と相輝いてゐる。そして遠く重り合つた白雲が樣々な形を作つて、大氣の中に五彩に光る。

阿美佐は散りかゝる下げ髮のはしを耳にはさみ乍ら、短い赤い袴の下から、彼女の年ごろの小供にしては太すぎる、茶色の靴下に包れた脛を、面白そうに小草にからませて、はねるやうに丘を登つて來た。赤い靴の脊のいくつもの一筋にならんだ黄色い瀬戸燒のぼたんが、そのたびにぎらりと光る。

丘の上の年老いた樹の下で、落ちかゝつた本包をかゝへ直した。その樹の下は、大きなお女郎蜘蛛のやうな根が手をひろげて、生々しいあか土のところどころに蟻が白く土をもたげてゐる。阿美佐は、その小さな俵のやうな形を見て、何かしらメルヘンの世界をふと考へた。

阿美佐の頭の上の太い幹のまわりを、小蟲がなき乍らそれからそれへと友を呼び集めては廻り續ける。小さい體の、よるべない丘の上にたつた一つ縞蝶が飛んでゐる。

下げ髮の頭をくり〳〵めぐらして、阿美佐はもどかし氣に丘のはづれを見まわしてゐる。急いで歩いて來たものか白い圓い頬がりんごのやうにほてつて、額にゝじんだ汗に、散り毛がぬれてゐる。指と指とくみ合した柔い小さな手に本包が重そうに乘つてゐる。

赤や紫や黄色やみどりに人形のやうに體を彩られて、いつも小鳥のやうにはねまわつてゐる阿美佐は、小さい體に手足のつり合もよく、すつきりとして、とりたてゝ好い顔ではないけれど中びくの眼の澄んだ、濃いまつげが形よく並んで、しつとりと露をいつもふくんだやうで、なめらかな頬のゆたかな曲線に、形の好い口許がいかにもあどけなく人の心を魅(ひ)きつけた。

そして一倍人なつつこくて、十三にしては無邪氣過ぎるくらゐいとけない。深いお納戸色地に銀茶で大きく鳳を浮した銘仙の肩が輕くふるへてゐる。そして又何故かしらほつと少さな吐息をした。涼しい春先の風がひとしきり阿美佐のまわりを取り卷いて、たつた一つの縞蝶と踊りくらべをする。

この丘のはずれは臺町續きで、むく〳〵とおひ茂つた樹の下は一様に黑ずんだ赤煉瓦の塀が、とげの立つた柊の生垣で圍まれた家ばかり建ちならんだうす暗い道路で、學校通ひの二三人より外はめつたに通らないので、いつもじめ〳〵としてゐる。丘と並んだ、緩かな細い坂は又高い石垣と、どす黑い濁つた溝をへだてゝ、無茶苦茶に茂つた雜木の土手とに片道をさへぎられてゐる。そして夏初めになると石垣の上に眞白くコスモスが自然に庭守もないのに咲き始め、そよ風の通ふたび道ゆく人に涙のやうに散りかゝる。

阿美佐はところ〳〵にもの淋しそうに咲き始めてゐる野すみれを見つけて、しばらくは小草の上を歩きまわつて居たけど又思ひ出したやうに立ち止つてあつちこつちを見まわしてゐた。と、そのじめじめした柊の影から、紺の細いずぼんへ両手をさし入れたまゝ、はだかつた胸から紅いへりを取つた白いちやけつがむき出しになつてゐるのもそのまゝ、いそぎ足で少年がひとり丘へ歩いて來た。そして阿美佐の姿を見ると、通りへ出るあのだらだら坂の上で立ち止つて阿美佐に聲をかけた。阿美佐は彈かれたやうにつみかけたすみれをちらし乍ら駈け出した。

「隨分待つて？」

少年の瞳が怪しく阿美佐の小さい體いつぱいに投げられた。阿美佐は少年の腕にぶらさがるやうにして只、頭をふつて笑つてゐた。そして一寸立ち止つて、後をふり返り乍らはこり顔に話し出した。

「榮次さんも少し待つてごらんなさいな、私の級の方が二人いらつしやるから」

「何しに？」

「今日ね、お當番がすんでから御一緒に歸りましやうつて、其方が仰つたのよ、で私ね、從兄が待つてゐるからつて先へきてしまつたの、私嘘つきね、從兄だつて」

阿美佐はたまらなそうに笑つた。又そして急に眞顔になつて、

「だけど私は始めてつかつて見たのよ。だつて皆樣は何と云ふと『從兄從兄』つて仰つしやるのよ。だから私も眞似して見たの。そうしたらその方逹がどんな方だか見たいんですつて、待つてゐましやうよ』

「つまらない、僕は見世物ぢやあない。」

「いやなの？　おかしな方」
阿美佐は又少年の腕にぶら下つて輕い足どりで、年頃の娘のやうな幼いしなをして歩き出した。
「ね何故厭なの？　待つていらつしやると惡いわ。その方は來年女學部の方へいらつしやる方達だけどほんとは學校は出來ないの。けどお芝居のそれは好きな方なんだけど――」
阿美佐はつまらなそうに、少年に云ふともなくつぶやき乍ら、坂道の小石をあちらこちらに靴の先でころがした。
「なぜでもよ、早く行きましよ。」
少年にとつてはそんなことより道行く人が皆々見返るやうな氣がしてならなかつた。けど何となくこの阿美佐の手を離すことが出來ないで足ばかり早めた。大きな先きの太い運動靴の黑いのに、小さい阿美佐の靴先きが小きざみに追つていつた。
「ね榮次さんこの間はら戸山の原から歸るときに、正眞寺の中を通つて來たでしやう。あのときお家の裏の頭領が見ていたんですつて、お家へ歸つたら、孃ちやん若い男の人と手などつないだりしていけませんねだつて。私阿母樣にそういつたら、子供の內はかまいませんけど大人になつたらいけないんですつて、だけど私は大人になるにはまだ〳〵間があるから好いわ。」
少年は默つて笑つてゐる。
「それから頭領のお神さんはこんなこといつたわ。孃ちやんは もう色氣がついたのかしらほんとに油斷がならないつて、色氣つて何私考へたけど解らないわ。」
少年は眞赤になつてうつむいた。

「榮次さん何のこと。あなたは何をいつても默つてゐるからいや。」

阿美佐は不滿そうに少年の手から離れて、軒毎に違つた商品棚をのぞき乍らはねるやうに歩いた。本屋の棚には濃い綠色をした孔雀石のインキ入れが種々の文具にまじつて一段高い硝子板の上に乘つていた。そのまわりには瀨戸燒きのおどけ人形が赤白黃色、茶、紫みどりと彩られて、硝子を通してプリヅムのやうに太陽の光線の美しく光る中にならべられてゐた。阿美佐は、ちゞれ毛の赤いトルコ帽をのせた、ひよろ高い人形をいつ迄も見てゐると、店の中から小僧が誘ひ顏にひよつこり出てきた。そして人形を一つ一つ日向へもち出してはハタハタと、羽はたきではらつた。白いほこりの煙がたつ毎におどけ人形の首が面白そうに動いたり、彈いたりしてゐる。

「美いちやん何してゐるの、道草をしてゐないで。」

少年は飾り棚からいつ迄も眼を離さない阿美佐の手だけずん〱ひつぱつた。棚へもどされた人形が阿美佐の方を向いて笑つてゐる。

「私阿母樣にあれ買つていたゞかう。」

阿美佐は握られてゐる少年の手をふりちぎつて駈け出した。本包の中の筆入れがガタ〱と音立てゝ阿美佐の走る後にいつ迄もついていつた。

「美いちやん待つていらつしやい、外の人が笑つてゐるぢやありませんか」

少年は當惑顏して追ひつき乍ら阿美佐の手首をつかまへて、ふり返り勝ちな阿美佐をなだめ乍ら、人目をまぶしそうにして歩き出した　こんなことを續けるのが少年の心を波立たせたやうであつた。恥しいけど柔い阿美佐の手を引きもどしたりするとき、訴へるやうな瞳と、少さい口からもれる異性

の温い息が少年には快よく、こうして春光の下を歩むことが、若さと云ふことゝ共に自分の誇りのやうに思へた。

「私ほしいわ。」

「お家へいつてからね。」

少年は阿美佐をすかして歩くとき、云ひしれぬけらくにふけつてゐるやうに胸をおごらせて、ほてる顔をいつもうつむいてゐた。

2

「寒くなつたのねえ。」

午ごろから、廣い戸山の原の奥からこの暗い杉の木立の中へかけて彼方此方と、阿美佐は少年に引き廻された。足が痛いからこゝらで休まうと阿美佐が云ふと、一寸立ちどまつて見てきよときよとゝあたりを見乍ら「行かう」と引きたてたり、薄暗い土堤の下あたりで阿美佐が厭がるのを無理に、永いこと座らせたりした。

阿美佐はすつかりくたびれて了つて、両足のつちふまずがづきづき痛み出して、家を出るときから抱いてゐる大きな西洋人形を持つ手がへし折れそうになつてきた。

「もう晩方だから歸りましやうよ。私お家へ行きたいわ。」

阿美佐は暗い木の間をこわごわのぞいては又思ひ出したやうに

「歸りたいわ。」と言ひ續けた。

ひるの間でさへ日の光りのとゞかない、深い杉の森は、陰氣に閉じられて、黑ずんだ群れ小笹の中に、ひがん花が一つもの狂ほしい手のやうに毒々しく咲いてゐた。截り倒された樹はいくつも亂雜に並らべられて、それが幾年も經つて、その脇腹にはやにがあちこちに固つて蛇の目のやうに暗に光つて、ところどころに一錢銅貨ほど、青羅紗のやうな苔が生へてゐた。じめ〱した黑い土の上はつる〱辷つた。そしてかび臭い重い空氣がしつとりと夜氣を含んで、地の中から湧いてくるやうであつた。

阿美佐は自分の家の門の前までくると少年をふり向きもしないで家へ駈け込んだ。母親は何かしていたらしくエプロンで手をふき乍ら出てきて、

「まあ今までどこで遊んでゐたの？　ごらんなさいこんなにぬれてまあ。」

「小母さんおそくなつてすみませんでした。」

少年は格子の影で子供らしく何氣なく詫びて、

「もうおそいからおいとまします。」と歸りかけた。いつもなら、上つて御飯でもたべて行けば好いのにとか、遊んでいらつしやいとか云ふのが只素氣なく、

「そうですか、それあまあすみませんでしたねえ。」

と阿美佐を抱えるやうにして奥へ入つていつた。少年はしばらく後を見送つていたが、やがて一寸舌打ちして生垣の傍を闇の中へのそのそときびすを返した。

「ごはんをお上り、まあ寒かつたらうね榮次さんはほごしらずで仕方がない。もう榮次さんと遊ぶんぢやありませんよ、恐い人なんだから」

母親は少さい聲ではゞかるやうに言ふので阿美佐は何だかぞつとした。

「母さんはね今榮次さんの叔母さんがきていらつしやるのだからひとりでこゝで喰べてゐるのよ。」

母親は次の間へ立つていつた。そしてにぎやかな話し聲がすぐ起つた。阿美佐は少年の叔母が來てゐて、それに今の母親の言葉を考へて、今日の自分の何となく秘密にしなければならぬらしい事件が知れてゐるやうに思へてならなかつた。でそつと箸と茶椀を音のしないやうに置いて、言ふやうに襖の合せ目から中をのぞいて耳をすました。

併し話しは何でもなかつた。幼い阿美佐の杞憂はすつかり晴れて、元氣に箸をしかも音たてゝ動した。

少年の叔母は牛込亭へ義太夫を聞きにさそつたのであつた。

着物を更へさせられて表へ出る時は又いつものお轉婆な阿美佐であつた。そして今迄のことをすつかり忘れて了つたやうにはしやいで、母親と少年の叔母を笑せた。

女鳥羽（めどば）川心中

（二幕三場）

五明倭文子

登場人物。

大工、山邊正作。
後妻、およし。
娘、お絹。
弟子、音松。
同　金次。
お絹の伯母、お民。
正作の情婦、おさわ。

序幕　第一場

（正作宅、普請小屋の場）

なくな歎くな可愛のお絹、なけご行瀬は止まりやせぬ………。

餘韻の長い流暢なる下座の鳴物にて幕開く。下手（しもて）に青々とした竹垣、洒落（しやれ）た木戸の入口。正面、雑木林の蔭に母屋らしき灰色の壁見えて、其前に二三段の植木棚、鉢物の花が美しく暗い舞臺を彩つてゐる。上手（かみて）に普請小屋の庇がつき出てゐて、其下に長い丸太を一本、桀木に乗せて金次（きんじ）が一生懸命に鉋をかけてゐる。金次はやつと十六七で丈夫そうな、よく稼げそうな弟子である。端唄か何か口吟み乍ら、スーツ〳〵と調子をつけて威勢よく削つてゐる。

其蔭に一人二十三四の、これは白い胸にかけた腹掛、辰美屋と染め出した紺半被も勿體ないような品のよい優男。竹筆を取つて何か圖面のようなものを引いてゐたが、ふと思ひ出したように立上つて、スタ〳〵と下手（しも）へ暫らく木戸の彼方に何か求めるらしい容子をしてゐたが、

音松。おい金公（きんとう）、手前（てめへ）はもふいゝから彼方（あつち）へ行つて休めよ。（と金次の傍へ來ていふ）

金次は默つて手を止めて音松の顏を見たが、ニヤリ

と一つ、こましやくれた笑ひ方をすると、鉋屑の取付いた手や足を拂い乍らサッサと母屋の方へ這入つてゆく。

音松はそれを見送つて、思はず太い息を吐いてから、其處の切株の上に腰を下す。黄昏の風が冷たく吹いてカサ〳〵と鉋屑が四邊に散ばつてゆく。此時外の方に優しげな女の下駄の音がしてお絹が歸つて來る。年は音松と同年位、スラリとした意氣な美しい女。きつと結んだ唇、張りのある涼しい眼元、白い肌。黑い髮、總べて勝氣な女と見受けられる。着物は細かい三筋縞の襟つきの素袷、黑繻子に淺黄と茶の手綱染めの腹合せを引つかけにして、素足に塗下駄を履いてゐる。小脇に小さな風呂敷包を抱えて、さも疲れたらしく木戸を押したが、そこに音松がゐたのでニッコリとして、

お絹。あら、音さんお前さん一人？

音松。あゝ、（音松は待ち設けてゐたように立つて、其切株を豆絞りの手拭で拂ふと自分はそこに轉がつてゐる丸太の端に腰を下す）

お絹。（切株の上に腰を下して解れた銀杏返しの髮をかき上げ乍ら）今日もまた得意先きが廻はり切れなくて途中で歸つて來たのさ、もと〳〵弱いからだの妾が此頃はこんなからだになつて如何して終日油臭い人の髮なんぞ結つて歩かれませう。でも恁ふして歸つて來ればね、それで、もうわたしやどんなに慰められるか知れやしないわ。（と、音松の方を見たが男は苦い顔して考へ込んでゐるので、自分も一寸暗い顔をしたが直ぐそれを押しかくすように）

お絹。音さん、何をそんなにふさぎの虫見たように默り込んでおいでなの？ 折角恁ふして早く歸つて來てゆつくり談もしたいと思つてゐるのに……

音松。あゝ話さう、實は先刻から待つてたんだ、離れてゐる時にや戀しくて堪らず、それで恁ふして居れや又心配が先にたつて……。（と、うなだれて、一寸してからお絹の胸の邊りをソット見やり）それにしてもお絹さん、お前今、こんなからだになつてと云つたが、一體その、その兒をどうせうと思つてるのだえ？

お絹。（思はず胸に手をやつて、其涼しい黑い瞳を闇の彼方に走らせ乍ら）妾やもふ決心してゐるの、ね、一日も早くお父さんに打ち明けて、其上の處分を待たうと思つて居る。

音松。さア其處分なら聞かずと知れてるだろう

ぢやないか、あの普通人ぢやない親方が何というか、どうして二人の命は……（音松はまた悲しい眼つきをして外方を向く）

お絹。だつて音さん、お前も知つてるだらうが、あのお父さんが今迄どんな行爲をして來ましたえ、それを思つたらたつた一人娘の妾の事、尠しは察して呉れてもね。まア妾や今迄何人の繼母に逢つてどんな月日を送つて來たとお思ひだ。（お絹は白い細い指を折つて寂しい顏をやゝ上向けてもの悲しい表情をする）

夜の緞帳は何時か二人を取卷いて、雜木林の彼方から僅かに赤い灯が透けて來る許り、空に細い三ケ月が蒼い光を投げて二人の白い顏をほつかりと闇の中に浮かしてゐる。

お絹。第一妾の母親からしてが越後の山中で働いてゐるところを、お父さんに擔ぎ上げられて了つて、後はどうなつたか覺えはないといふ其時の談。それで妾を生んでから二年足らずで蹴殺されたか、絞め殺されたか、知らないが何でも普通で死んだんぢやないと、妾やお民伯母さんから聞いて知つて居るの。それから後だつて妾や隨分酷い目に合つて來たわ、寒中に裸身で雪の中にたゝせられて、もうもうからだが凍えてお腹が空いて、そのまゝ倒れて了つたようなことも一度や二度ぢやなし。忘れもしない十四の時には遊廓へ賣られようとして、それが否さに三日も四日も逃げ廻つてる中に、小學校の校長さんに救はれて、お蔭で學校も續けて出して貰つた、そんな悲しいような嬉しいようなこともあつたわ。（お絹の語調や、蓮葉に自暴氣味にきこえて來る）それから天神の師匠の家で又一苦勞、それでもね、慥ふして獨りで稼ぎが取れるようにして貰つたのは、まア一つは今の繼母さんのお蔭さ。

此間、音松は默つて折々點頭いてお絹の談をきいてゐる。背後より後妻のおよし年四十位、蒼い面瘦せのした見るからにヒステリカルの女、髮を櫛卷きにして黒つぽい縞の袢天を着てゐる。二人の影を認めてソツト佇む。

音松。（何となく立ち上りて四邊を透かし見乍ら）また餘り話し込んで誰かに見られちや惡い。（といふ）

お絹。（立上つて名殘り惜しげに倚り添ひ）まださつくり相談したいこともあるけれど、ぢやアまた

後刻（のち）にでも

此時、母屋の方から小田原提灯の灯が搖いで林の中が次第に明くなり、カサ〳〵と草を踏む荒い足音がする。およしは背後を振り向いて見て、驚いて二人の前に飛び出す。

およし。お父さんが來なさるらしい、早くお前達彼方へ……

二人は慌て、右と左へ逭入つてゆく。

およしは其處にお絹が忘れて行つた風呂敷包と、音松が今落して去つた豆絞りの手拭とを拾つて、脊後の方へ氣を配り乍らヂツト思案の體にて幕。

二幕目　第二場

（お民宅、侘住居（しつ）の場）

舞臺の正面に粢苴の粗末なる家構ふ。赤い壁、煤けた壁、右の方押入の上が佛壇になつてゐて、寂しげな蠟燭の灯がトボ〳〵と瞬いてゐる。其前に薄い汚れた布團が敷いてあつて其處にお絹が寢てゐる。正面に破れた障子が一枚、それは奥へ行く口である。下手藪の前に紅葉せる蔦の葉のからまりたる釣べ井戸、傍に水のヒタ〳〵した桶に細い柄杓が乘せてある。幕開いて後も暫らく空虛。やがて正面の一枚障子を開けて、お絹の伯母お民、年五十餘り、木綿縞の着物前掛、これもやゝ勝氣らしい女、盆の上に土瓶と湯呑とを載せて持ち來り、一寸井戸の方を見やつてから、

お民。絹（きい）ちやん、さアまた藥を煎じて來たからお上りよ、少しは眠れてかえ？（とお絹の枕邊に坐る）

お絹。（一寸頭を上げて見てから起きて布團の上に坐り直す。澤山の髮を束ね髮にして銀かんで止めてゐる。病氣揚句の美しい顏が更らに凄艷である。意氣な荒い縞の着物に新らしい浴衣を重ねて、紅入りの稍狹目（せばめ）な帶をしてゐるのが前よりは若々しくて一層いたいたしい。

お絹。伯母さん、わたしやこんなに御世話になつてほんとにすみませんわね。（と細い聲）

お民。なんの、絹（きい）ちやんそんな氣兼ねならもうよしておくれよ、それよりや一日も早く癒つて復た稼ぐのさ、それにお前今大事なからだぢやないか、もしものことがあつたらあの音（と云ひかけて一寸そこらを見廻はし）ねー、どんなに歎くか知れやしないよ。

お絹。（うなだれて帶の間にきやしやな手を入れ）だけど伯母（ひさ）さん、わたしやとても生き永らへてあの男と添ひ遂げようとは思ひませんわ、繼母（おつか）さ

んがあんな死に方をなすつたのに、わたしやどうしておめ〳〵と生きてゐられませう、どうぞ一日も早く冥土へ行つて繼母さんにもお詫びしなくつちやならない身ですもの……(と諦めてゐるようにいふ)

お民。それアお前間違つてるよ、およしさんが死んだのは決してお前達の故ぢやありません、いづれあの女は一生樂は出來なかつたのさ。

お絹。伯母さん、それやどうして?

お民。どうつて、そんな談はまたお前の神經を興奮させる許りだから。それよりやほんとに早く丈夫になつておくれ、妾やあの音松は幼い時から手にかけた丈にどんなに可愛いか知れやしない、(と、うるみ聲になつて)お前のお父さんもまアなんといふ人間なのかねー。

お絹。(一寸袂で眼を拭いて)伯母さん、わたしやもふ諦めてゐますから……

お民。(いぢらしいといふ思入してヂツトお絹を見乍ら)お前あの丹波屋のおさわといふ女中知つてるかえ?(と聞く)

お絹。(一寸不審の體にて)えゝ妾知つてますわ、何だか否な女であんまり口もきゝませんけれど、それがどうかして?

お民。(それには答へず、少しく間をおいてから)それにしてもあのおよしさん、何も首まで縊つて死なずとものことだけれど、あの女も酷い神經病みだつたからね。だがあの時、わたしやほんとに驚いちまつたね。久し振りでお前の家へやつてゆくと、丁度お小晝時分でね、あの金次がニコ〳〵して妾の先きにたつて家の中へ這入つて行つたのさ、と思ふと、直ぐヒヤーッと云つて上り框へ轉がり出したぢやないか、またあの小僧奴何をふざけるんだ、と思つてサッサと家へ上つてゆくと、およしさんがあの店と茶の間との敷居の上にヌーッと突立つてゐるのさ「今日ハ」妾も何の氣がつかず恁ふ云つて傍へ行つて見て驚いた。お前あの只さへ幽靈染みた顔が、眼は飛び出して鼻が曲つて、きゆうつと喰ひ絞つた紫色の唇からは生々しい血がタラ〳〵と流れ出してるぢやないか。見ると首に紐がかゝつてゐる、足

ハスレ〳〵になつてる、妾も驚いて、もすつてのことに轉がり出さずにや居られなかつた。（此間お絹は苦しげにして聞いておる）それから直ぐに金次を醫者と父さんの處へ走らせなきやならないと、思つて呼ぶけども彼奴がまた腰を拔かしちまつて動けやしない、まア妾もあんな變な思ひをしたな生れて初じめてだつたね。それからお父さんがまたまるで逆上せちまつてお前さへ見れや、およしの仇敵だ殺す〳〵つて、ほんとに此お前が何に見えるんだろう……

此折丁度、藪の蔭から正作、年六十近く、酩酊せるらしい顔、ギコロりとした恐ろしい眼光、頭髪未だ黒く半ば拔け上りて如何にも貪慾にして好色らしき爺、紺股引に赤茶縞の袢天を着、双の手に鉈を振り上げて太いだみ聲。

正作。咄、生かしちやおかれねい女郎奴、覺悟しろ。（と足許危く部屋の中に躍り込む）

お民。（す早くお絹の前にたち塞がる）

お絹。（すつくと立つてヨロ〳〵とよろめき乍ら、迫る正作の手許を拔けて急ぎ一枚障子の奥に入る。）

お民。（續いて入らんとする正作を抑ふ）

正作。（一息入れてウンと蹴るよりお民はそのまゝそこに倒れる）

これにて舞臺少しく廻はりて釣べ井戸正面になり、下手、立樹の蔭より花道へ出づる道見える。

お絹。お父さん、待つて、待つて下さいまし。

お絹、家の背後より逃げ來て苦しげに井戸側によりて、手桶の水を柄杓にて一口飲む、ところへ正作追ひ來て、兩人井戸の周圍を二三回巡はり、最後にお絹、正作に解けたる腰紐を取られて井戸の前に轉び、斜め後向きとなりて片手を上げる。正作、片足を井戸側にかけ、片手に水色の腰紐を取り、片手に鉈を振り上げてよろしく見向。

お絹。お父さん、どうか暫らく待つて下さいませんか、妾やお願があります、それをきいてから殺して……（お絹は一心に苦しい聲を振り絞つたが、血迷へる正作は聞き分けず復た追ひ廻はす。お絹樹立の間より花道の方へ逃げる。）

兩人西花道より東花道にかゝる間に舞臺の道具廻はりて第三の場面となる。

二幕目　第三場

（正作宅、母屋の場）

舞臺下手に母屋、二階家である。正面の奥雜木林にて前の普請小屋と同じ地內、其他は總べて庭の構らへにて楓の紅葉せる、銀杏の黄ばみたるなど、寂しき中に秋の趣を見せてある。

お絹。（東花道より逃げ來て三七にて一寸背後を振り返つて見る。白い素足に亂れた裾を踏みしだき乍らヨロ〱と舞臺にかゝつたが、恰も喪心した人のように銀杏の樹に脊をもたせて、ボンヤリとあらぬ方を眺めてゐる。）

家の中より金次、何氣なく出て來て其前を通りかゝり。

金次。あつ、これやお絹さん、（と驚いたように、又なつかしそうに云ふ）

お絹。（も、氣がつき）おゝお前は金次、妾や一體何處にゐるのだえ？（と四邊を見廻はす）

金次。お絹さん、こゝは自家ですよ、だが今に親方にめつかると危い。（と氣遣はし氣に云ふ）

お絹。自家！　ほんとにわたしやどうしてこんな處へ來たんだろうね――、あの御父さんは何處に、伯母さんは……（と何氣なく母屋の方を見上げる）

折から二階の障子を啓けておさわ。三十前後のデブ〱と肥りたる、大丸髷に抜衣紋、厚化粧して下品にして厭味たつぷりなる女、此方を見下す。

お絹。（おさわと顏見合せてハツト吃驚、見る〱蒼い頰の肉が緊張して、唇を喰ひ絞ばつたが、ハラ〱と落涙する）解りました、解りました、わたしやお父さんの心が今解めました。（と云つたが俄かにカツとしたように、頭髮の銀かんを拔いて家の中に飛び込んでゆく。金次、驚いて續いて入る。）

此時、やう〱正作爺、これも疲れたる樣子にて東花道より舞臺に來り、鉈をそこに投り出して、家の椽側にドーと腰を下す。中よりおさわ、飛び出でゝ正作にぶつかる。正作驚いて立ち上る。おさわ、庭へ降りて雜木林の方へ逃げてゆく。お絹。根元より黑髮亂れても凄き血相して其後を追ふ。正作、お絹をひつ掴んでそこに引摺り倒す。お絹、悲鳴を上げて倒れ乍ら、足に冷たく觸つた鉈を見るより早く、自分の咽喉に當てんとす。

正作。吃驚して虛空をつかみ悶絕す。

お絹。（傷口よりたら〱と流れる血をあびながらうつゝのやうに鉈を持つたまゝ花道の方へゆく）此時、舞臺の背後より音松。唐棧の袷にお絹と揃ひの浴衣を重ねて、きつとひつ端折り、裸足にて走せ來りお絹を見つけて急ぎ後から抱きしめ鉈をもぎ取る。お絹、抑へられて、もがくを……

音松。靜かに、音松だ（と耳に口をつけていふ）お絹さん、お前はまア飛んだことをしてくれたなー。（と云ひ乍ら舞臺の眞中へお絹をつれてゆき、からげた裾をおろして銀杏の根方にお絹を抱いたまゝ腰をかける。

お絹。（ヂーッと音松の顏を見てゐたが）あゝッ、お前は音さん。（と音松に夢中にしがみつく）

音松。（しつかり其身を抱いて、暫らくは言葉も出でぬ容子、思はずさし含んで）お前、飛んだことをしてくれたなー。

お絹。（そつと夢のやうに音松を見上げて土色になつた唇に微笑を泛べたが其儘苦痛に堪えかねて）あゝッ（と云つてそこに倒れんとする）

音松。（またヂッと抱きかゝえてやり乍ら）落ちついてくれ、おちついて、（とおろ〳〵して云ふ）

沈默。下座にてしめやかなる調の琴を彈く。

お絹。（だん〳〵顏蒼ざめ、引く息ばかり多くなり斷末魔の苦痛に陷る而して夢中で）わたしや……どう、どうか音さん、誰も來ぬ中に早く彼方へ、彼方へ。

音松。（お絹を抱いたまゝ眼を閉ぢ考へに沈んで居たがやがて觀念したやうに）お前一人はやられぬ冥土へ、さア一寸も早く……。（立ち上るやうな身構へする）

お絹。……………………

音松。お前も知つての通り此音松は、由緒ある人の落胤とかいふものゝ、女役者の母親が旅で死ぬ時人手に預け、預かつた奴が二つの時、菰に包んであの女鳥羽の川上へ投り込んだ。それが幸か不幸か浮木に乘つかつて、其夜の嵐に吹き上げられ、筑摩の河原で情ある人に拾はれて、どうにか今日まで二十餘年を生き延びたは、これやお前と私を共に死なせるための、前世からの約束ごと、さアあの河原まで大儀ちやあろうが急いでくれ。（と、立ち上る）

お絹。（音松の腕に縋つてハラ〳〵と涙を落し）うれしい、嬉しふござんす。お前に因緣深いあの女鳥羽川、親子三人引きつれて、妾やこり〳〵した此浮世の苦勞を今を限りに流れる水で……（とたえ〴〵に云ふ）

音松。（女の手を引いて二足三足歩きかけたが、ふと立ち止まつて）お絹！（と、悲痛の聲にて呼ぶ）

お絹。（男の手につかまれたきり、其儘虛空を掴んで悶絶しやうとする）

ハラ〳〵と銀杏の落葉、二人の肩に散りかゝる。

これにて靜かに幕。

（八月十七日）

新秋雑語

▼炒るやうな暑熱もない中に冷露蟲語の朝夕となり、私の家の傍の青桐なぞはもうばつさりと一葉二葉づゝ毎日落ちて來ます。取り別け今年は不順で陽の射す日が少なかつたので一入秋早しの感に打たれます。庭に立つて高い梢を仰ぐと二三萬枚もあらうかと思はれる蟲食まれた青葉の層が微かな風にも喘ぐやうに騒めいて短かい餘日を名殘惜しげにしてゐます。其の幹に止つて啼く蟬の聲ももう間もなく絶えるのかと思ふともつと高聲で啼けと云つてやりたくなります。

▼よい子供は命短かし。かう思つて私は云ふに云はれぬ惜しい惜しい心持がします。何故と云ふに私の知つてゐた二人の美しい少女が恐しい疫痢でみまかりました。一人はみづ子さんと云つて德田秋聲氏の令嬢、一人はあや子さんと云つて秋田雨雀氏の令嬢で何れも今が可愛らしい盛りの十と八つでした。此の春本郷座に「虎公」の興行があつた時、N氏の夫人と私はみづ子さんとその兄さんとの四人で一つの桝に入つて見物しました。涼しい眼付のみづ子樣は時々私の眼と逢ふと自然ににつこといとほしく笑顔を傾げました。大變お裁縫がお上手だつたとの事です。あや子さんはお父樣ゆづりの黒眼勝の柔和な心持はにかみを見せるゴム人形のやうな孃さんでした。襖の三寸位開間からちらちらと見ては隱れちらと見ては隱れ隱れした幼い姿が泌々と思出されます。

▼私は此頃昔頻りに書いたやうな赤裸々な心象を其の儘一面からばかり見て記すやうな感想が書けなくなりました。そして評論をするには私の頭は惡くて性格的に冷靜な聰明がなく、他の人々のやうな小説としては是も悲しい事には技巧が拙ないのです。大變一時困りました。仕方がないので感想ともつかず、小説ともつかず、つまり私獨りぎめの小説を書いて見てゐます。進歩か退歩かしれませんが、私も段々變つて行

きます。

▼何か面白い讀物はないか。かう思つて神樂坂の古本屋に入つた私は不圖二十年前の古雜誌が並んでゐるのに氣が附きました。文藝倶樂部第十二編臨時增刊の閨秀小說で明治二十八年十二月十日に發行したものです。紅葉に色紙といふ表紙の繪で、錦繪風の美人の木版畫があり、執筆女流作家の寫眞がずらりと並んでゐます。何と云ふ珍らしい又懷かしい人々の寫眞でせう。ヴエールに洋裝の小金井喜美子女史、ふつくりと肉附のよい整つた顏、若松賤子女史は眼鏡を掛けた細顏の人、樋口一葉女史は浮世の苦を嚙み分けた引締つた口元、これは廣く人の知つてる寫眞で、牡丹の半襟を廣く見せてゐます。次の頁は、田澤稻舟、伊藤緑花、石榑わか子、北田薄氷の四人で、稻舟女史の艶麗な容貌が殊に目に映ります、澤山な黑い髮を高島田に絹房付の花簪を兩方にさし、藤色地かとも思はれる友禪縮緬の着物に厚板らしい帶を立矢の字で、非常に才氣のある情熱的な美人です。此の人が山田美妙齋と愛し、後には世を怨んで自殺した人かと思ふとロマンチツクな其の短い生涯が悲しくも亦美しくも想ひ描かれます。『しろばら』といふ作は眠睡藥で辱かしめられた美少女の自殺を書いたもので、今見れば自分の運命を語つてゐると見てもいゝ位です。一葉女史の『十三夜』『やみ夜』賤子女史の『忘れがたみ』が載つてゐます。近い中に女流作家追慕會をしようかといふ折柄、こんなものを見た私は二日も三日も繰返してもまだ懷かしい氣持なのでした。

▼『小野の賴風が塚に生ひけん草を男郎花とよび、女の塚なるをこそ女郎花とは呼べ。我が文ぞ僞りなる。あな物狂ほし。此の筆を燒き此塚を發き一葉の舟を江河に流せば、舟は斷崖の下を流れて舟中は二人の影あるべし。御かへり言こそ待たるれ。かしこ』これは男から女への戀文です。虛子氏の書いた『俳諧師』の中に女郎上りの女を妻とした五十嵐十風といふ男の生活がその妻とゝもに非常に巧みに描かれてゐて、夏目漱石氏等も激賞してゐますが、私の胸に十風よりも鮮かに纏まつて興味深く殘つたのがこの戀文を書いた水月といふ青年で、モデルは藤野

古白と云ふ人だらうとの事です。此の人は遂に拳銃で自殺します。この人の戀も、自殺も、また日常の行爲も殊に其の度々見たと云ふ夢も陰鬱な天才的な性格をよく現はしてゐるものです。戀文を貰つた娘は親に直ぐ見せて了ひましたが、この戀文の深い悲しい意味は一向分らなかつた模樣です。さてこれに返事をするには何と書くべきでありませうか（花世）

▼此間、ゆくりなくも芭蕉翁の俳句をよんでゐるうちに「澁柿や一口は喰ふ猿のつら」といふ句を見付け出して非常なショックを感じさせられた。今更ながら翁の澄み渡つた心の眼が恐ろしく、私は其句の上にしるしをつけて本をとぢた。夕方になつてふと又其句の意味を思ひ出して一人味つてゐたが、ふと澁柿を、だつたらうか、澁柿もだつたらうか　と初句の一字をいろ／＼にして考へて見たが、どうも、を、でも、でも落ち付かないやうな氣がして、翁ははたして何と言はれたらうと思つて急いでさきの句集を開いて其所を見ると澁柿やとしてある。私は思はず聲を出した。それは俳句としての約束でもあらう、けれどもこゝを澁柿をとも、もともせずに、や、と切ると十七字の短い詩形ながらいかにも落ち付いて意味津々となつてくるのをおぼえる。自らは下手な句を吐いたわいと思つて赤い顏をした。澁柿も一口は喰ふ猿のつら――せゝこましくこれ見よをやつて、成つていない。私は自分に未だし／＼と呼ぶやうな心持を感じた歌だの俳句だのは詩形が短いだけそれだけ一字一句が重いつとめを持つてゐる。私は翁をいよいよあがめた。

▼私は或る意味から言つて芭蕉の行つた藝術の境を自分の藝術の理想としてゐる――といふのはあゝゆう風雅の事實をさういふやうにたどるといふのではない、「物言へば唇寒し秋の風」といへば此一句の持つてゐる風韻は男にも女にも高きも賤きにもそれ相應にひゞいてゆく、しかも此句の持つてゐる意味は津々として、とても凡人の行きつけない處である。專門家ばかりに分る藝術はまだ藝術として極地にたつしたものではないと思ふ、やはりどこまでも凡人には凡

人として各の分、分る程豊なものでなければならぬと思ふ、と言つてその境には人間一生の間に行けるか行けぬか分らぬ程の心の修業をして始めて行きつかれる境であるといふ事を分つて貰ひたい、いきなり平民文學だとか、誰れにでも分るものを、とか言つて安價な藝術を尊ぶ心では夢々(ゆめゆめ)ないのである、だから必ず一度は專門家でなければ分らないといふ處を通らなければならない、さうしてそこを自ら歩み出した所に此大自由の境はあるのである。聲で言つたらほんとうに吹切つた聲、藝で言つたら名人の藝、である。實に高言を吐く次第であるがかういふ心持から言つてゆくと、蕪村の句はまだ／＼專門家ばかりを相手(?)の句が多いやうに思はれる、然しそれを私は決して輕い心から眺めない。たゞ／＼芭蕉翁の行きついた境はほんとの名人の境である、眞の大僧聖(?)の境である、それを自らは理想としてゐる。かろ／＼しく行きつける處ではない(邦子)

何か好いものを書きたい――實のあるものを書きたい、そんなに始終思ひながら、つい下らない雜務や何かに囚はれてゐて頭が混雜して仕舞つて何にも書けない、本當に事務なんか取つてゐると頭腦が現實的(リアリスチツク)になつて仕舞つて詩想なんか浮ばない、小說なんか書けなくなつて仕舞ふ、さうしては毎日ぐずり／＼と暮して仕舞ふ、此頃は頭腦がつく／＼二つ欲しいと思ふ、詩を作る頭腦と事務の頭腦と私には其二つが何方もあやふやなのだからほんたうに困つて仕舞ふ。花世さんなぞはいつも心配して、最うあなたのものは書けましたか何うですなぞとよくいふ、えゝ締切迄には書きますよ、左樣言ひながら又其儘にしてゐる、私はこれで自分は常識的である現實的であると思つてゐる、そして、花世さんのやうな人を詩人だと思つてゐたけれど左樣ぢやない、花世さんが案外キチ／＼してゐて殆ど藝術を創作されるのでさへも事務のやうにキチキチと運んで行くのに感心して了ふ、そしてほんとに羨ましいと思ふ。(たづ)

八月廿八日印刷所で校正しながら

* * * * * *

鉢の朝顔

杉浦翠子

癒えむ日のいつとも知らぬ馴れ馴れし薬の香こそかなしかりけれ

身の恙未だも癒えず秋かけて鉢の朝顔咲くはかなしき

ゆくりなくも朝のまゝなる朝顔の花のさびしさ今日の曇り日

ほど〳〵に日脚(ひあし)高めば朝顔の花堪えがたく見え初めしかな

生きの身の勞れさびしも掌(てのひら)に氷を置けばしゞと解けゆく

秋立つや屏風の影ゆ鳴き出づる一つ二つの蚊さへかなしも

秋淺く殘る暑さにうらなりの瓜の細りはかなしかりける

鳩尾(みづおち)に溜まる心地に日をながみ殘る暑さに瓜食む我れは

君がかざす洋傘(パラソル)の色覺え居り今々と門に出でて待つかな

曇り日の壁に鏡は照り返へし身はつゝましく針運ぶなり

ひとり居の今日の閑(しづ)かさ現し身の己れ鏡に寫るを見れど

二方に見ゆる數をばかぞへけり鏡の前のさふらんの花

穂に出づる芒の花はうらがなし我の心はいひがてぬかも

片戀はかなしきものかとぼとぼと君にまみゆる路いそぐなり

五月雨に水いや增せし濠(ほり)の水向ふの岸を人ゆくが見ゆ

玉垂れの小簾は古りけり夏休み今日かも果てて君かへるらむ

勤めなれば今日も電車に乗りてゆく眞夏の日なり君はかなしき

殘り居るは汗のしみかも麥藁の帽子はやくも秋立ちにけり

しみじみと秋の雨降り夏帽の汚ごれ黃色く君出でゆくも

前號正誤「堪へがたきかね」は「堪へがたきかな」「夜をふしけり」は「夜をふかしけり」の誤。

姉と妹と

遠藤琴子

いと遠き沖の小島にわが二人打ち上げられてまどへるに似る

みなし兒かやもめぐらしかいなあらず戀人と居て淋しき日かな

死なましとまだいはねども顔ばかり眺め合ひつつ更けし夜半かな

ああわれも女なるかなかかること何の意味ともつかずしていふ

君戀し君を戀しといつまでも言にいはねばあき
足らずてふ

わがかたへはなれて行けば見知らざる人にひと
しと君をなげきぬ

曲り角君が帽子の見えにけり急ぎて下る階段（きざはし）の
音

二つ三つ惜かりしこととり出でて心すすまぬ衣
すすぎかな

朝出でて夕にかへるいつとなく別るることの初
めならぬか

わが家をさしていそ〱かへり來る君を思へば
涙流るゝ

白き服少しよごれて疲れたる君かへり來ぬ早く
抱かまし

一切を捨ててかへり來わが前にただその身のみ
そこなはず來よ

臥せる身も君がかへると思ひてはいそ〱起き
て酒かひにけり

君が言よきとあしきと二方にかたよりてのみひ
びくものかな

ただひとり妻を迎へて遊ぶこと忘れし人のいぢ
らしきかな

以下妹の死に

姉はまだ足らぬ心のまどふなり君は忙はしくか
へりたるかな

忘れものとりにかへりし君ならん夫（つま）を待たせて
子らを待たせて

ああ釟子いづこの雲となりにけん此處をわが家と知らですぐらん

八月ほど前に別れし此の姉を思ふひまなく死にたりにけん

死にたるは君か病かにかくに君が姿の見えずなりぬる

生きんこと強く願ひて君死にき死をばはかりて死なぬわれはや

若き人死ぬといふこと君にして始まるごとき驚きをする

初七日わが手向けたる籠花があやしみながら露こぼすらん

ああ釟子獅子にかまれて死にたるにひとしき悔いを殘したるかな

百里をば隔てて共に病み臥してかなしき文をかき交しけり

ああ釟子そなたはつひに死にたるかそれだけのことさばかりの世か

つつましく娘となりて妻となり母となりたる君早く死ぬ

手をとりて君を電車に送りたるあの生き別れこの死に別れ

五才なる君の娘が泣きまどひこひまろびつつかなしむと聞く

右左わすれがたみをかき抱き君が脊こそは更に泣くらめ

旅なる吾が子に

原阿佐緒

百合の咲くみちのくの山夏深かみ汝が旅ゆけばいや淋しかも

帳ぬちにひとりひそみて何思ひつゝ雨のさ中を行にきけん汝は

壁を蹴けて泣きむづかりし子ながらに今は遠しも一人旅ゆき

脱ぎゆきし衣の破れを見るにだに遠きわが子のおもほゆらくに

草むらに杏の赤きつぶら實をひろひつゝ思ふ東京のこと

うちびさす都戀ひしみ眞晝日の青木の下にあさる巴旦杏

巴旦杏ひとり拾へば眼近かなる木に蜩の啼ける寂しさ

夏祭りかなしき吾子が履き初めの赤塗下駄のうれしくて泣かゆ

けうらにも眠るわが子の顔書くともくたんをもつ指かなしも

寢し兒の柔手まさぐりはてしなく物思ふ吾に晝の虫鳴く

しろがねの鈴

櫻井八重子

由井が濱やこの夕なみにあしあとの四つは消ぬとも浮名消ゆまじ

長谷の寺やたふとき御像おろがめど君とありせば心とまらず

ゑんむすびふたはむれにをゆびもて結びしのちのうきなうれしも

雨のふる戀のあめ降る行きてまた君と相傘（あひがさ）さして歸らむ

鎌倉や戀のかけらのこゝにまたこぼれてありと知らざりしかな

君は見むあゝ吾（あ）がをみしひとみもて他（さ）のあだ人を見てむ妬（ねた）まし

毒やくも匕首（あひくち）もみな夢に來て君をころせとまぼろしはいふ

君をまた我よりほかに愛（に）しとみばその女こそなぶり殺（ころ）さむ

何故（なぜ）に君は生きてものなど言ひたもふながし目にして人をみたまふ

したたるゝ小指（とゆび）の血（ち）うけし白き皿（さら）きみの血はこくわれのは朱（あけ）に

小指はも悲しかるらむ君故にきづつきにしとかこつがにして

血のいろのいづれいづれとさだめ得ぬたゞ一やうに戀の朱にして

昼はひそ〳〵せまり傷口を吸ひにけらしなほのにいたむも

蟋來て夜半の灯になくころぞ離り住む身をなげくもろとも

いとし妹はやすらかに寢てむかたへ寢て君に文かくこの姉はしも

君をかの傀儡とみれどかばかりのことにもわめし妬みごゝろは

牡丹ばけつよくたゝけど涙はもおしろいの上をほろ〳〵まろぶ

はき出すほうきの先にチヽとなりてまろび出でけりしろがねのすゞ

かなしきは下司の口より廣ごれる二人の戀のなりゆきにして

きみが魂われすこやかに守りそだつ心の乳母となりにけるかな

なまなかに人をおもへばあさましき妬みにもえむ市松愛でばや

廢驛の雨

岡本かの子

廢驛の壞れし家の壁ぎわにあをあをとしも繁る夏草

廢驛の橋のたもとにただひとつ痩せたる犬のあへぐ夏の日

廢驛のとある夕の軒に見し旅藝人のいたましき群

青白き巡禮の子のとぼとぼと小雨にぬれて暮る廢驛

都より戀のかくれ家もとめ來し二人をぬらす廢驛の雨

なにとなく朽ちし香のただよへるたそがれどきの廢驛の雨

先に行く君が俥の靜やかにゆれて旅路のうら安きかな

○

君乘せて汽車は去(い)にけり茫として青田のなかの停車場にたつ

殘さるる我身のつらさ殘し行く君が悲しみひとつにし泣く

ただひとつぬれたる頰のいやはてのほほえみを見て君車窓(まど)を閉づ

停車場の柱のかげに一しきり泣きたる後にまたも見送る

しのび泣く君がかい撫づる旅人のひとりだにあれ今宵の汽車に

いいい、はらはらと車窓(まど)際にたつ我髮に君が涙のかかりけるかな

いかばかり都より行く美しき君を待つらん北海(え)道(ぞ)のねたしや

我ごとくまためでますや我ごとく君戀ふる子の北海(え)道(ぞ)にもあらば

えらばれて北海道を守りに行く君の雄々しさもまたうれしかれども

下泣きつつ我に別れて行く君と知らで迎へん北海道の司等

美しき若き士官の君が率は北海道の兵卒等よいかに和まん

しみじみとまたもみつめぬ北海道に行く士官に惜しき君が容貌よさ

美しさ雄々しさ實にも日の本の男性のほこり君に如くなし

別れ來てたたむ袂に見出でたる涙のあとにまた泣かれけり

はるばると行きぬるものか北海道と云ふ文字まづかなし君が消息

君行きぬああ我前に何ものもあらざる世とはなりにけるかな

秋に入りて

三ケ島葭

夕ぐれ我が子車に轢かる

何をたのみ心ゆるしてありし身ぞ幼き子を街に放ちて

轢きたるは空車さぞよろこびし子の怪我なきをたしかめて後

子を守るが我の命と思はねど命ならでは子の守りがたし

この母は汝を車に轢かせたり今ある汝は我の子ならず

おのが子はわれあやまちて荷車のわだちにかけぬありと思ふな

命もて子を守らんと思ふとき疑ひがたき命さなりぬ

×

心さへ破れし衣のここちして横はる床に秋の虫鳴く

てすさびに挘りし草をてのひらにながめてあれば秋の風吹く

煤けたる唐紙とればくづれたる土の竈のあらはれにけり

心地よき飢をおぼゆるあかつきの身にかな〳〵の鳴けばかなしも

起きいでんあかつきの空燃えてあらばかなしき心しづまらんかも

初秋の風吹く野にもあらざるか我の心をひるがへすもの

わが背子をなみしがちなるこのごろの心よかなし人に知らゆな

この風を戀人よりもなつかしくおぼしむるは誰の心ぞ

しみ〴〵と醒めたる戀のなげかるる心にしばし人のやさしき

蒼天を離れんとして離れえぬ雲のみづからくづれゆくさま

世のありて世の人ありてかたはらに病む子のことはあらぬ心か

みづからの怒る心を雲に見て風の涼しくなりけるかな

こはれたる子の玩具をば見苦しきものと思ひて片づくるなり

みづからにいとふさはしき夢をみるこのうつそ身ぞさびしかりける

この日しも座敷掃けどもちらばれるおもちやもあらず心むなしも

みづからのさがならはしの一つをば示しておのがあやまちと愧づ

我に似しあまたり癖を持てる子をはた我ならば誰かあはれむ

女流作家の動靜

■平塚明子氏　先月の下旬平塚明子氏が一家を擧げて上京されてゐるといふ『よみうり抄』の記事を讀んだ私は、去年の末まだマントを着る頃お別れをしたきりなので、是非お目にかゝらうと思つて曙町のお宅を訪ねました。二十分ばかり待つてゐるとやがて出て來られた氏は『まあ、よくいらして下さいましたね』と下ぶくれの頬に笑湛へて見守らるのでした。髮はいつものやうに眞中からわけて、海邊の光に馴れたお顔はつやつやと色付いて本當に健康さう。『女中がなくつて困つてゐます。向ふは良い所なんですが、夫が不自由で』と云はれる。『曙生さんにお目にかゝりませう』と云ふと、『では今連れて來ますわ。黑くなつてゐますよ』そして重さうに抱いて來た曙生さんは男の兒かとも思はれる程で、もう手を振つてにこにこお母樣と一緒に笑ふのです。丁度其の處に外出から奧村博史氏が歸つて來られました。『坊やにおもちやを買つて來ましたよ』そのおもちやはおどけた顔をしてゐて坊やさんのおもちやにも、御兩親のおもちやにもなりさうな珍しい品でした。平塚樣は工合よく胸に可愛いい子供を抱いて調子よく母親らしい身體付で搖さぶりながら、立つたり腰掛けたりして話しました。

■素木しづ子氏　一時非常に心配をした氏の御病氣も日を追ふておよろしいとの事で、嬉しいと思つてゐます。平塚氏とはほんに近い處で毎日逢つていらつしやるとの事です。お噂によるとしづ子氏はお見舞を云ふと『ええ、もう直りましたわ』と本當に直つて了つたやうに云はれるさうです。非常に氣の勝つた方なのです。櫻子さんと云ふ二つのお孃樣があるのですが、しづ子氏の病氣で附近の人に一時預けようかといふ餘儀ない事になりました。すると子煩惱な上野山清貢氏は居ても立つても可愛いくて、可哀相でたまらなくなり、すぐ其の日の中に引取て了はれましたとか。

■伊藤野枝氏　野枝さんはどうしてゐるのだらうとは何人も思ふ事でした。私も隨分波瀾を起した後の氏は大阪か大原か東京かと思つてゐますと、本月の初めの或る夕暮れ、丁度藤村氏作の『黄昏』の人々のやうに――勿論内容は違ひます――私の家の小さな門にお入りになりました。『どなたでございますか』暗い方に向いて私がたづねると『私ですのよ』見ると野枝さんなので、『まああなたですか』と思はず私の聲は大きかつたのです。大杉榮氏が御一緒でした。私は大杉氏に初めてお目にかかつたので、其の一口に云へない氏の特殊な印象はここには書かない事として、野枝氏は非常に明るいいそいそとした聲で話して、不思議な程柔かな女性味を帶びた笑顔を絶えずお見せでした。『平塚さんにお逢ひになりましたか』かう野枝さんは訊ねたり、『ビアトリス』をぱらぱらと見たりしてお二人は十五分位して歸りました。(H)

聖書印象記（其一）

山田邦子

心靜かに聖書を味ひつゝ、目を自分のまわりにそゝぐ時に、普通から言つたらば有り得べからざる事とし、一笑に附し去り得るやうな事が、案外にも非常な權威となつて輝くのをおぼえる。

イエスは嘗て、其御傳道の終りに近づいた或る日、ベタニヤより外へ行かうとなされた時に饑を感じて遙に無花果の樹あるを御らんになつた、イエスは其時あの樹には何かあろうと思つて近づいてごらんになつたが其樹には葉の外に何も見えなかつた。それは丁度まだ無花果の樹の時でなかつたのである。其時イエスは樹に向つて、今より後永久に爾の果を食ふ人あらざれと言はれた。翌日其樹のそばを過ぐる時にそれが根からことごとく枯れてゐた。ベテロがこれを見て「ラビよ、あなたのお咀ひになつた無花果は枯れて居りますと言つた、其時イエスは答へて「神を信ぜよ、まことにまことに吾れ爾につげん、誰れにても其心に疑ふ事なく其言ふ處の言必ず成るべしと信じて此山に移りて海に入れといはゞ其如くなるべし」とおつしやつた。恐ろしい言葉である、此キリストが海の上を歩かれた此キリストが五ツのパンと二ツの魚を祝して五千人の人を飽かしめた。私はそれを信ずる。

○

聖母マリアの事については、四福音書中ビルカ彼が一番力をそゝいで其人を現してゐるやうに思ふ。

舊教では聖母マリアを神まで引あげて、キリストと同じ神格にしてあるといふが、新教徒の私はさういふ點からマリアを論ずる事は出來ない、唯人間としてマリアを味ひ、其マリアにふるゝ時に、そこに丁度神の使のやうな尊い人格――むしろ人間としては不思議なほどの――を認める事が出來る、自分の如き罪の女が言葉にのぼすのは、あまりにそれはけがす事であるかも知れないけれど、私はいつもマリアの――特にルカ傳の――キリスト受胎の傳をよむ時に、此マリアは全く人間であつたろうが、神の使がかりに人の世に降つてゐたのではなかろうかと、恐れを通りこして驚きの心をおさへる事が出來ない、今左にルカ傳一章の一部をぬいて見れば

「天の使此處女に來り言ひけるは慶たし惠まるゝ者よ、主なんぢとともに在す爾は女の中にて福なるものなり。處女その言を訝りこの問安はいかなる事ぞと思へり。天使言ひけるはマリアよ懼るゝ勿れ爾は神より惠を得たり、爾孕みて男子を生まん其名をイエスと名づくべし。かれ大なるものとなつて無上者の子と稱えられん又主たる神その先祖ダビデ王の位を彼に與ふればヤコブの家を窮りなく支配すべく且國終る事あらじ。マリア天使に曰ひけるは我らまだ夫に適ざるに何にして此事あるべきや天使答へて言ひけるは聖靈なんぢに臨る至上者の大能なんぢを庇はん是故に爾がすむ處の聖なるものは神の子と稱えらるべし(略)その神に於て能はざる事なければなりマリア曰ひけるは我はこれ主の使女なり爾の言へる如く我に應れかし天使つひに彼を去れり

「處女其言葉をいぶかつて此あいさつはいかなる事ぞと思へり。」マリアには此あいさつはまだ喜びをも悲しみをもはらませなかつた。たゞ不思議に其聖い目をみはるのであつた。其時天使は「マリアよ懼るゝ勿れ爾は神より惠を得たり汝孕みて男子を生まむ其名をイエスと名づくべし云々」といふ實に晴天の霹靂と言はふか死人の甦りと言はふか、いや〳〵晴天に霹靂はまだ有り得る事である、死人は甦らないともかぎら

ない、まれには有つて來たのである。然るに此世界始まつてより以來一度も決して例のなかつた。又どう考へてもある譯のない處女の受胎を言ひ渡されたのである。然るに此聖い處女は之を何んと答へて受けたか、私は此マリアの返答を讀むたびに身の震ふをおぼえぬ事はない、勿體ない涙は私の罪に黑い心を靜かにうるほす。マリア曰ひけるは「我はこれ主の使女汝の言へる如く吾れにあれかし」此答を味つて見れば、凡らく人をしてマリア程厚き信仰を持つてゐた人が又と有ろうか、其心を完全に神に服從させてゐたものがあるだらうか。此ルカ傳の始めにあたつて、祭司ザカリヤの話がのつてゐる、其話を背景にして味はふ時に私はいよ／＼其心を深くされるのである。ザカリヤは祭司である。殊には洗禮者ヨハネの父とまで選ばれた、言はじ其信仰を神によしとせられた人であつた。其人すらもなほ汝の願ひが聞かれた、汝の妻は間もなく男子を生むであらう其名をヨハネとつけよ云々と言はれた時にザカリヤは何と答へたか、それはいかにも人として答へさうな答をとつて答へた。即ち自分は既に年をとつてしまひ又妻も年が邁んでゐる、何んで其事が御座いませうと答へた。これによつてザカリヤはヨハネの生れるまで啞させられてしまつた。然し私は此ザカリヤを決して笑はない、それは人間としていかにも考へさうな事を考へ、言ひさうな事を言つてゐるのである。然し此前話が有つてからマリアの返答をよむ時にいかにマリアは信仰の厚い心であるかが分る、マリアの血のなかには一滴の罪のしみもないやうである。

すでに主の聖言なりて其身は處女ながらに身ごもつた。さうして間もなくユダの邑のザカリヤの家に行つてあいさつした時、ヨハネの母エリサベラは自分の腹のうちに胎兒がをどるを感じ聖靈に充たされてマリアを祝福した時にマリアの答はどうであつたかルカ傳はかう書いてゐる「マリア曰ひけるは、我心主を崇め我が靈わが救ひ主なる神を喜ぶ是れその使女の卑微をも眷顧たもふが故なり、今より後萬世までも吾を幸なるものと稱ふべし其れ權能を持ち給へるもの吾れに大なる事をなせり、その名は聖くその

あはれみは世々かれを畏るゝものに及ばん」云々、何んと言ふ意味深遠なる言葉をもつて答へたろう、マリアは自分を萬世までも幸なる者と信じ切つてゐた、その信仰は喜びにあふれて輝くばかりであつた、マリアはちつとも嘘を言はなかつた。たゞ其心は神の光で充ちあふれてゐた。かういふ心を持つた人が有つたといふ事は全く考へれば考へる程私には不思議である。さうして私の心は叫ぶ、マリア程立派な女人はない、マリア程潔い女人はない！

○

聖書程味ひ深いものを此頃の私は外に見出す事が出來ない。それはたゞ信仰といふ點からばかりでなしに、其味ひである。

萬年斧を入れぬと聞く彼のエジプトの奥の大深林に分け入つた時の心持も此聖書が持つ深い味……内に内にと沁みこんでゆく恐しい神秘と自然のなかゝら湧く莊嚴な味ひにまさる事はないであらう。自分は何故それを早く覺る事が出來なかつたろうと自分の心のあはれに鈍く頑固であつた事を恥しく思はずには居られない。そこには一個の人間の肉がある、血がある、喜びがある、恐れがある、不安がある、さうしてこの凡てが最高の理想完全なる靈に向つて活動をしてゐる。萬人を貫いた願望の生きた記錄――姿である。それは古來よりのいかなる藝術もいかなる化學も、此一見粗雜なやうな聖書の重味にはかなはない、聖書の味ひにはかなはない。例へばこゝに磨きこまれた千古に越したる藝術品があるとしても、それは此聖書のなかから掘り出した一片の石ころを磨きこんでダイヤモンドにしたものであるのみである。こゝに例へば世界を震動させるやうな化學の發見があつたとする、それは聖書が含んでゐる（說いてゐるとは言はない）事實をより人間に分りやすく解く事が出來たといふに過ぎない、貧弱なる己の創作を無上のものとして神と聖書を笑ふ人々、萬能者は蒼穹の上からおかしさを忍んで居られるであろう、「愚なるものは心に神なしと言へり彼等は腐れたり」何んといふ痛切な言葉であらう。

病床小録

岡田幸子

私はふつと枕と顔の間に左の手を入れた。そして只美麗に、はでやかに著飾つて私の床の側に座つてゐる若い夫人を見上げた。

「一ヶ月餘も寐てゐらつしやる。かうして獨りで、何んて淋しい事でせうね。

妙に取澄した聲で彼女は云つた。

「いえ貴女が考へて居られる程のものぢやない。私の側にはイブセンもゐます。ショーも人待ち顔をしてゐる。時折りはケイ、ギルマンの兩女史にも逢ひますもの。」

私はかう云つて枕元に積み重ねてある數冊を指した。そして心から笑つた。

「貴女の生活は昔の幸福なものと少しも變らないのね。同じ部屋に机を並べてゐた人達は皆、別々になつてしまつて俗に云ふ世の中に苦勞してゐますのに。私はいつもどなたかにお目にかゝる度に、貴女の事をお話しゝて、羨ましがるのですわ。先日もS様に逢ひましたら、私達のクラスの勝利者は貴女お一人だつて云つてゐらしつてよ。」

「さう。けれど、私は未だ勝利者とは云へない。自分が目睹する光明は遙か彼方にある事を意識します。その光りに到達する迄は、自分は勝利者であるか或ひは敗者であるか解りません。自分を勝利者として羨んでゐられる貴女達は私に云はせると御自分から好んで飛込んだ波に足を掬はれて跪いて居られる樣なものですよ。」

「貴女の御言葉は私達の結婚生活を意味なさるのでせう。ねえ、さうでせう。」

「えゝ。愛のない結婚。自分が生きなければな

らない手段としてする結婚。私にとつては恐ろしい事に思へます。貴女方に自巳を見る目があれは、決してそんな虚僞な生活には入れない筈ですわ。然し現代の一般婦人に對する家庭及び學校敎育は、「臭いものには蓋をしろ主義」で眞實がないのですもの。私は一途に婦人自身を責めやうとは思はないけれど、自己に就いて思索する事なく、他人の意のまゝに、つまり後方から突かれるから、やむなく階段を登つたと云ふ樣な態度は、私どうしても感心する事が出來ない。」

「たしかにそれが私達の結婚に就いてとつた態度ですわね。あの場合後方の人をつき落しても他に逃れる道はあつたかも知れないわ。」

夫人は言葉を切つてふつと私を見詰めた。昨日から降り續いてゐる雨は未だ止まない。二人の間の少時の沈默を縢る樣に雨滴の音は一本調子にカン〳〵〳〵としてゐる。私は靜かに口を開いた。

「人間はいつも自己が第一義でなければならない。自分の身の眞の幸福をはかる爲に自己以外の者、貴女方の場合なれば、其の後方の人を突き落す必要があります。それは罪惡ではない。正しい事だと私は信じてゐます。」

「ねえ、あなた、私が今日上つたのは御病氣見舞と云ふ名目ですが、實は幼な友達の貴女のお宅へ出て日頃の息抜きをしたいと思つたのですわ。どうぞ私の泣言をちつと聞いて下さいね。それは貴女にとつて眞實に馬鹿らしい事でせうけれど。」

「えゝ、何でもお話し遊せよ。それで貴女の心がすむのなら私は聞きませう。久し振りにお逢ひしたのに、貴女にとつては肩の張る樣な事ばかり云つて居ました。少しは貴女の泣言とやらも聞かなければならないでせう。」

私は微笑して體を起した。その時女中が盆に藥瓶と茶椀をのせて入つて來たからである。夫人は苦笑して、私を見てゐる。女中は私の側に座つて藥を注いで出した。

「お孃樣、食後三時間目のお水藥で御座ゐます」

「さう、有難たう。」

私の飮み終るのを待つて彼女は再び盆を持つ

て部屋を出て行つた。若い女の赤い帶が私達の目から消えた時、夫人は口を開いた。
「私が氣兼ねをしなければならない人達に取卷かれてゐる事は、貴女知つてゐらつしやる筈ね。只單なる氣兼ねだけなら、それ程でもありませんわ。けれど此の頃は御姑樣が忌はしい眼鏡を通して私達を御覽になるので、尚一層辛いのです。」
「忌はしい眼鏡！ それはどう云ふ意味なの。」
「私はつく〴〵思ふのよ。未亡人の滿たされない淋しい心を。私はてつとり早く露骨に云ひますわ。御姑樣がね、良人と私の仲を嫉妬するのよ。夫婦ですもの、たまには二人きりで話してゐる事もあるし、一所に外出しなければならない事もあるわ。其の度に兎や角云はれるので、やりきれないのよ。そればかりなら、未だ辛棒の仕樣もあるのですけれど、良人迄がね、自分は勝手に毎晩遲く迄美しい色彩の中に浸つて歸るのに、私が一日でも家を明けるとそれは大變な騷ぎなの。實は昨日もY町の姉の家へ行つて夜になつて歸つたのよ。すると夕方着物を着代へに歸つて來ましてね、玄關を入ると私のスリッパが脫ぎ捨てゝあつたのでせう。それで時代は何處へ行つたんだつて、つべこべ皆に間糺すのですつて。奉公人だつて好い顏はしませんわ。嫉妬は私がする筈だのに、役割が逆ふわ。ほんとうに厭になつて仕舞ふのよ。」
「嫉妬は愛の副產物！ ねえ、御主人は貴女を愛してゐらつしやるから、嫉妬なさるのだと御思ひなさい。すれば厭になる所か、うれしくつて、仕樣がない樣になりますわ。」
私は早口に云ひ切つて笑つた。
夫人は本意なさ想に口を噤むだ。
「貴女と私は總てに大變かけ離れてしまつたわ。昔はよく二人が一人の氣持ちの樣になつて話したものでしたね。然し今ではそんな氣持ちになれない。私は何となく物足りない。不愉快です。」
「私もそれを心付いて居てよ。二人の間は餘り離れ過ぎましたのね。かうなつたのも自然かも知れないわ。」
「貴女のお話しは私にとつて何にもならない事

だし、恐らく私の話す事も貴女にとつては何の興味もない、聞いても聞かなくても、よい樣な事でせう。」

「でも、私の前に出る多くの人達は腰ひくゝ心にもない上滑りのする事ばかり云ふので、貴女にお逢ひする時ばかり、私は眞實さを見ます。それが御世辭でも何でもない所が氣持ちが好いの。其の意味で私は何の蟠りもない貴女の御言葉をそのまゝに受入れますわ。」

「有難たう私は誰れに對しても眞實でありたいと、願つてゐるのです。」

「私は歸ります。餘り長座してそれが爲に、夕方から御熱が上るなどは感心出來ないのですもの。」

「さう。それぢや快くなつたら又、お目にかゝりませう。」

「ぢや御大切に。さよなら。」

「さよなら。」

夫人は衣ずれの音をたてゝ、部屋を出て行つた。言葉は聞きとれぬが母との話聲が聞える。

私はそつと立ち上り、棚から驗溫器をとつて、腋に挾み、そのまゝ横になつた。雨は小止みなく降つて居る。八月、長雨、出水、などの言葉が頭に浮んだ。——大正五、八、四。——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

秋になつて

加藤みどり

（初號に私の幼時の思ひ出を書きました。これは其のつゞきと思つて讀むで戴きます）

昨夕子供を連れて散歩に出かけると、夜の色に包まれて露が螢のやうに光る樹立の繁茂の中から馬追虫の涼しさうな啼聲をきいた。私は此の馬追虫の音が何より好きである。といふのは、私の田舍では鈴虫も松虫も、くつわ虫も居ない、唯土用が過ぎて少し秋らしくなつた頃から啼く、馬追虫と、蟋蟀が居るばかりである。私の方では此の馬追虫をスキッチョと云つて居る。水色の涼しさうな薄い羽を持つて、小さい身體をした此の虫は毎晩のやうに家の中に這入つて來て、障子や、襖や、又蚊帳にとまつて二疋も三疋も啼いて居る。此の虫の音は何程耳元でなかれても騒々しくない。先日も鈴虫を買つたが、其の啼き聲が騒々しいと云つて不服をとなへた位であるが、此の虫だけは、眞當に秋の聲を出して啼く「秋が來ました」「秋が來ました」と云ふやうな感じを與へる。秋は此の虫の音を聽くと、どうしても幼い頃の思ひ出を繰り返さずには居られない。スキッチョと月、初秋の懷しい自然の思ひ出……、蟋蟀になると寧霜夜の寒い寂しい晩の事を思ひ出すが、馬追虫は、少しも寂しい感じを與へない。私は好きだ。眞當に大好きだ。

既う畑の玉蜀黍も、大角豆も熟しきつて實がかさ／＼になつてさがつて居る頃、私はそつと畑へ這入つて、馬追虫の啼聲をとめて行つた。未だ十歲にもならない私の小さい身體は、澄んだ月の下に浮き出て見えて居たのであらう。手

をやつた大角豆の蔓の間、大きな長い葉を垂れた玉蜀黍の茂つた中に、二疋も三疋もスヰッチヨ〳〵と秋を揶揄うやうに啼いて居る。月の光が私を導くやうに照らして居るが、暗い蔭のところが多いので、私の眼にはちつとも分らない。でも、微の音をたてゝ、其の小さい虫が葉から葉に飛んで、月の光に浮び出た時、早くも私の小さい兩手がそれを掬つてしまつた。

『何をして居るの。足がよごれるよ。』との聲に私は思はず茂みの中から振り返つた、そこに白い浴衣を着た母が佇むで居る、月の光が、母の顔を眞面に照らして、彼の大きな美しい眼が優しく私の方へ注がれて居るのを知つた。(母の眼は眞當美しかつた、私は若くて死んだ母の眸を今に忘れない。)

大角豆の葉は大角豆の匂がした、玉蜀黍は玉蜀黍の匂がした。濕つぽい土の匂がそれ等の野菜の樹の匂と混交つて一種の夜の空氣となつて幼い私の心を恍惚とさせた其の初秋の夜の中には、月もあり虫もあつた。懐しい母の白い笑顔もあつた。袖の長い浴衣に赤い友染の帯を結んだお下垂姿の私もあつた。

其の頃の私は、今のやうに人の世から受ける主觀で自然を觀て居なかつた。從つて、純な自然を純な心で享け容れる事が出來た。或人は云つた、「子供の頃の視覺と、成人してからの視覺と違ふが故に、星でも月でも子供の時に美しいと見たものが、成人してから其の美を觀ずる事が出來ない」と

私はよく月や星を仰ぎながら、どうかして昔のやうに其の美に打たれ、恍惚の境にさまよひ度いと希つて見たけれどどうしてもさう云ふ感じをうける事が出來ない、それと同時に堪らなく寂しくなる。私が昨夜馬追虫の音を聴いた時も其麼氣がした。只思ひ出を繰り返すより仕方がなかつた。其の頃の八歳や九歳の私は今は同じ年頃の子供の手を率いて居るのだもの。

私の方では九月の初めから其の月中所々にお祭がある。村社郷社、或は小さい區のお宮までもお祭で騒ぎ廻る。九月にはいつて、二百十日二百二十日の役日の頃は人心が何となく落ちつ

かず、天候も百姓の心を揶揄うやうに落ちつかない騒々しさを持つて居る。此の役日が無事ですみでもすると大に祭禮に景氣をつけるといふわけである。未だ單衣物の頃なので、白い派手な浴衣が其のお祭を目立たせる。

第一の景物は花火であつた。今は私の幼い頃よりは大變花火熱も薄らいたやうであるか、今から二十年も前には非常な花火熱が全村否、殆ど上下伊那兩那を湧き立たした。下伊那郡の飯田の花火と云ふと、六寸七寸八寸といふ大きなものがあがる。それが八里も隔つて居る私の村まで峯つゝきに響いて來るといつたわけで、今夜は某村の花火明晩は某社の花火といつて、村の花火好きは辨當や酒肴を携へて村境の原までわざ／＼出かけて行く。

私の村では二ヶ所のお宮であげた。一方のお宮は少し遠かつたので餘り騒がなかつたが、一方のお宮は村の西にあつて縣道よりは半里も西にはいつて居た。村社でもない區の小さい祠であつた。玆の花火は村の一流の財産家が競つて良い花火をあげるので、村でも見物であつた。

私の記憶に存して居るのは、或る年であつた。私の家でもわざ／＼飯田町から技師を頼むで、村の若い衆も三四人來て花火を詰めて居た。私も何でも其の傍で叱られながら小さい竹筒に硫黄臭い藥を詰めて居た事を覺えて居る、偖其の時であつたと思ふ、花火を詰めて居てそれが破裂した爲め一方の手をもぎ取られて私の家へ暫く入院して居た人があつた。

其の年は殊に花火熱が盛で未だ其の頃宅に居た叔父も其等の技師や若い衆と一緒になつて、顏を眞黑にして夢中になつて居た。

愈々其の當夜になると父は早くから人々を率いて出かけて行つた、あとには母と私等子供ばかりで、祭の御馳走の仕度をして居た。

花火は夜の九時頃からでなければあがらない。

それまでにお宮の方角に向つた病室の椽側に花筵を敷いて、いろ／＼の御馳走を並べて居ると花火見の客が四五人集つて來た。前の婆や、髮結のお鶴さん。隣のお杉さんなんどと云ふ連中であつた。

もう其の頃は夜風が寒いので、皆長持の底からでも出して來たらしい黴臭い半纏などを纏つて居た。
野や山を越した遙遠くの鬱蒼とした黑い影が花火のあがるお宮の森であつた、ドンドドドンと太皷の響きが微にして來ると間もなくズドンと云ふ音と共に中天にポツンと云つてパツと火の花が咲くと、忽然として散つてしまう。極く新らしい手のこむだ仕掛花火は村の人々は何處の家であげたのか知つて居て、あれは、誰さんの是れは某家のと云ふやうに批評した私の家の花火も、幾番目にあがるといふ事が判つて居たので、皆心にそれを待ちもうけた。
花火と花火との時間は十五分以上あつた。その間待ちどうしいので、お互に喋つたり、食べたり飮むだりした、遙の森の方からは折々陽氣な騷音がひゞいて來た。
空はかつきりと晴れて西山の方に傾いた五日頃の半月か靜かに懸つて居た。
暫くすると、突然眼前の野と山の邊からジユー〳〵と云ふ凄じい音をして火が流れ出た、その長い火の蛇のやうな光が草の上一間ばかりの邊をはつて圓形をつくつたと見ると草の中に落ちた而していつまでもジユー〳〵云つて居た。
『ありやあ、「流星」のしそこねだねえ。』と誰やらが云ふと、間もなく木の間から現れた失敗者らしい黑い影は火の消えるのを見て、
『やゝ失敗!』と叫むだ。
『あら叔父さん?』と私は思はず云つた。叔父は父と一緒に出かけたと思つて居たのに、此の失敗の花火をあげたさに、どこかに隱れて居つたものらしい。
『まあ、榮樣かな。』と母は叔父が近づいて來たので聲をかけた。
『今度はやりそこねないやうにして御目にかけます。』と云つて叔父の姿は母屋の方へ消えた。
二つ三つ花火がすむだ頃、又先度の方角から同じやうな「流星」がのたくり出た。眞直あがる筈なのが、矢張蛇が馳け出たやうに地の上をはつて、クチ〳〵とゆつて消えてしまつた。其の有樣が實に滑稽であつたので、私等は思はず笑つてしまつた。

『榮樣はお上手だなむ。』と婆やが揶揄する。滑稽な失敗者は頭をかきながらもう斷念したらしく祭禮の方へと行つたらしい。

此の「流星」といふのは下から尾を曳いて怖ろしい音をたてゝ雲を突いてあがるのである、がだん〳〵下から火が消えて、仕掛のある時は其の頭から仕掛の火が殘つて、赤、靑、紫と糸を曳いて、落ちて行くのである。子供などは仕掛のない此の「流星」をよくあげたものだ。

花火の終ふ頃はもう十二時過ぎて居るので、私などはおしまひまで觀て居た事は無い。いつでも母の膝か、婆やの膝に仆れて、朝眼をあいた時は床の中で父の傍に眠つて居た。一年中で子供達が樂しむのは、お正月と此の祭頃であつた。

尙ほ祭禮に就いての思ひ出を書いて見ると、私の家の近く―小町谷區と云つたが―此處に秋方樣と云つて小さい祠があつた。玆の御祭禮にはいつも父が鳥居に掲げる額を書いてやるのが例となつて居た。私の覺ゐて居るのは、或る年の事、大きな腹をした狸が提灯をさげて行く繪を畫いてやつた。それを粟や小豆でこしらへて鳥居に掲げた。

此の秋方神社の祭には、お詣りに來る者に皆强飯の握飯を百姓達が集つてこしらへて配るのが例であつた。私は、彼の土の泌みた大きな百姓の手が、無器用に握つた大きな握飯を强いられて困つた事を覺えて居る。そこにもこゝにも、百姓の小供達が、其の握飯を立ち食ひして居る。私は父母から其麽ものを貰ふのでは無いと嚴しく云はれて居たので貰ふまいとして居たのが手强く强いられたので道々泣いて歸つて來た事があつた。其の狸の額が鳥居に掲げられた年であつた其祭禮の夜には區の七つ八つの男女の子供が皆揃ひの襦袢を着て浴衣を肩脫きにして大きな歌舞獅子の紅白の綱を曳くのである。そのお獅子の幌の中に村の若い衆の囃方が這入つて笛太鼓でねり歩く、それに又扮裝したおかめさん、赤鬼靑鬼、傘打、その他いろ〳〵奇怪な變裝した踊子の連中が一列になつて囃に合はして調子よくやつて行く。綱曳の子供――獅子抱きとい

ふ――達の美しい袂と、花笠と、花笠の下の紅白粉で化粧した可愛らしい顔と、銀の紙を張つた脚半草鞋に固めた小さい足とが、一番目立つて見える。ヒユー〳〵ルドン、ドン、ソラーイと云つたまことに陽氣な音が、久しい間の稽古の苦心を思はせる位調子を揃へて靜寂な田舍道をねつて歩く。月も星も、人間もうかれ相な夜、百姓の低い廂に吊るした提灯も風に搖いて、人々の心はすつかり浮かれて居た。

私は人中に出てはいけないと云はれたので家に居て賑かな囃がたへ〴〵家の方へ近づいて來るのを聽いて居た。

間もなく其の華かな一群は街道から私の家の方へと這入つて來た。不思議に思つて居る間もなくどつと玄關の前で鬨の聲があがつた。見るとかなり廣かつた庭が祭禮の人々と見物人で一杯になつて居る。赤い獅子が群集の中から大きな口を開いて居る。蓮の花が池に咲いたやうに子供の花笠が入り亂れて居る。

踊子の一群が玄關の上に上つた。私は奥の座敷で何をするかと見て居た。するとそこで又囃につれて踊が始つた。裏の勝手口や、湯殿から下駄穿で人々がどん〳〵上つて來るので、叔父は聲をからして叱つて居たのを覺えて居る。

何といふ騷ぎであつたであらう。只夢中になつた踊子の顔、昂奮した世話役の顔、覗やう覗やうと押しあふ見物人の顔が、只もう私の幼い目に狂はしく並べられた。

其の大きな華かな一群が踊つてしまつてどつと出て行つた、私の家の内外はまことに狼籍なあとを止めて居た疊の上も板の間も土だらけ、庭には子供の花笠のこわれたのや、下駄などが散らばつて居た。日は此の庭を照らして馬追虫は相變らず啼いて居た木立を渡るさら〳〵と云ふ初秋風の音の間から遠くに去つた囃の音が流れて來た。何と云ふ樂しい思ひ出であらう。今のように何事をも享樂出來ない程冷め果てた私は、あゝした馬鹿氣た快樂を何麼に喜んだであらう。長い〳〵一貫した苦痛の人生のほんの一部に於ける馬鹿氣た遊戲――其思ひ出が私の涸れ果てた心を甘露の一滴となつて潤して呉れるのである。――（八、一五）――

ビアトリス社詠草

吉田春子

匂やかにレッリーは咲けりひたすらに君をおもへる少女のまへに
此小さき少女の心かの秋も深みし日よりなやみ初めてし
しみ〴〵とわが黒髪を愛ずるかな心わりなく君戀ふるころ
美しうまろらかにしもわが心君をたたえてもの思ひすれ
君よ君よと戀ひつゝ灯ともりぬこのひと夜さもおもひねなまし

宮川ゆみ子

一すじの白き煙のゆらゆらと山かげに見ゆ炭を焼くらむ
さんさんと眞夏の光線(ひかり)ふりやまず那須野十里の白く點せる
一すじの路しろじろと消ゆる果那須山脈の青く光れる。

町井久子

うなだれて有が悲しや街を行く硝子の窓に見出し我の
湯の中の曇る硝子のざれ書にも淋しき文字を選ぶわびしや
雨繁き夜半の寢ざめにうつりたる燈火の光泣かまほしかれ

長谷川未女子

ひねもすを葉裏返えして吹き渡たる風をしきけば秋もきぬらし
片明あかり鈍ぶき光のさし添えと眺むるひまに暗らむ寂しさ
幾日かこもりて居れば結ひ上げし髮の佳きさえ味氣なきかな

秋野多香子

ひつそりとやもりはひいでみじろがすくらの土塀のましろなるかも
いやさらにいとしからまし庭をこめてすなどる背子をまつあさのうみ
ともに香も掟(おきて)やぶりとなりなましいとしき背子に煙草ゆるして

緑野麗子

さびしやなひとりある夜を籐椅子に身をなげてきくこほろぎのこゑ
河風は涼しう吹きぬ舞妓らの絽友禪の袖に銀のかざしに
舞妓らの京言葉などまねてみつ河原の床に涼みする宵

今井稠子

今宵また裏の小庭の草の上に母ます里の星を數へぬ
瓦斯の灯の搖らぎ懷し順るわが家の庭に螢とぶなり
裾とればぎにまつはる夏の蟲われ愕きに小走りてけり

月波みつる

夕ざれば夏草繁る野に立ちてせめて心に君を見んとは
待つ人もなくて佇む野の夕べ月をかすめて渡る涼風

石井俊子

口づけし花は靜かにふるへけり紫匂ふ露こぼしつゝ
暗にのみひたりてあればしみ〴〵と君戀しさのひろごりて行く

ビアトリス文藝研究會清規

■本會は女流作家の搖籃とも稱すべきものにして主として作品の批評添削に應ず

■本會は文藝を愛好し創作する女性を會員とす

■會員の寄稿は撰者の嚴密なる撰擇の上これを誌上に掲載し、他は批評を附して返送すべし。（但相當の返信料を要す）

■年二回雜誌ビアトリスに新進作家紹介號を出し會員の作品を廣く文壇に紹介す尙其他にも時宜に依り誌上に掲載することあるべし

■會員の短歌はビアトリス社詠草として毎月誌上に掲載すべし

■毎月一回研究會を開き文壇大家の講演あるべし

■撰者は左の諸氏に依賴すべし

（小說）森田草平氏（小品）未定（評論感想）生田長江氏（短歌）編輯局選

附録

處女

森田草平

繪具箱だの、調色板だの、スケッチの板や、油繪の額縁の有るのや無いのや、古塚の中から掘出して來たやうな、口の缺けた壺だの、、混然雜然と拋り出してある中に、三次は疊の上に頰杖を突いて寐そべりながら、お延の化粧の出來上がるのを待つて居た。お延は椽側に近く鏡臺を持ち出して、白粉を掌の平に溶かしながら、頰に鼻の頭を撫で廻して居た。

『おい、そんなに鼻の先ばかり濃く塗らないで、頸筋の方も塗つて吳れないか。顏ばかり白くて頸筋が黑けりや、お面を被つたやうで可笑しいよ』と、三次は寐ながら聲を懸けた。

『未だこれからよ』と、お延は振向きもせずに返辭をした。そして、仰向き加減にしながら、咽喉佛の邊りを塗つて居る。

『だが、何うも未だ頸筋の方が黑いやうだね』

『え丶、頸筋は餘程濃くつけなけりや黑く見えてよ。』
『ぢや、顏の方を少し遠慮したら可からう。』
『だつて、私にやア濃い化粧でなきや似合はないのよ。濃い化粧のこつてり作りでなきやア——着物だつて紫とか紫紺とか、山の手式の派手な物ばかりよ。』
『生れ附人間が無粹に出來てるんだね。』
『まア酷い！』と、お延は白粉に汚れた手を擧げて男を打たうとした。
『だつて、自分で左樣言つてるんぢやないか。怒ることたアないよ』
『だつて、酷いわ、人を無粹だなんて』
『ぢやア山の手式であつて同時に粹でもありたいと言ふんだね。此奴慾の深い女だなア。』
『知らないわ』と、お延は一寸拗ねて見せた。そして、片手に耳の後ろの後れ毛を持上げながら、やけに白粉を塗り始めた。三次も默つてそれを見て居た。
やがてお化粧が濟むと、お延は押入から支那鞄を持ち出して、明石の一重と派手な絽模樣の夏帶とを取出した。そして、手早くそれを着替え始めた。其間一語も物を言はなかつた。やがてちやんと帶を結んで帶留をぱちりと嵌めると、默つて男の前に坐つて見せた。
『お丶、最う支度が出來たね。ぢや直ぐに出懸けよう』と言ひながら、男は帽子を取つて立ち上がつた。お延も其後から隨いて出た。
二人は一年前から相思の間に成つて、此春の末から所謂共同生活を始めた。處が、今日の午過ぎ三次の仲間の畫家で大井に住んで居る男の細君が脚氣衝心で亡く成つたと知らせが來たので、三次が取

敢えず見舞ひに行かうと云ふのを、お延が引留めて夕方から一緒に行かうと言ひ出したのだ。で、一丁許り來た時、お延は背後から聲を懸けた。

『そんなに急いで歩いちやァ私が隨いて行かれないぢやないの。隨分想ひ遣りのない方ね。』

『左樣か』と、三次は眞個氣が附かなかつたやうに足を緩めた。

『あのね』と、お延は三次に寄添ひながら『此間竹乃さんの許へ△△さんが××さんと一緒に袂入したんだ相ですがね、歸る時に△△さんはちやんと格子を開けて××さんの出る迄待つて居て、それから自分も小腰を屈めて出て行つたんですつて。隨分溫和しく成つたもんですわね。ねえ面白いでせう、それが△△さんだからさ。』

『うむ』と、三次は何とも言はなかつた。

『だつて、女が男に征服されるのされないのと言つた處で駄目ですわね。女はちやんと男に征服されるやうに運命づけられて生れて來たんだから――』

『そりやァ好い心懸けだ！』

三次はそれだけ言つた。が、五六歩行つてから女の顏を覗き込むやうにして、如何だい、最う機嫌は直つたやうだね？』

『だつて、誰も怒つてなぞ居やァしないぢやないの』と、人通りのないのを幸ひに、お延は甘えるやうに男の腕に縋つた。

電車の中では、二人は並んで腰掛けたまゝ、殆ど物を言はなかつた。三次は夕刊を買つて讀み續け

て居た。品川迄の電車は飽き〳〵する程長かつた。お延は男の横顔を偸み見るやうにしながら、時々寐不足らしい欠伸を半ば開いた扇子で叩いて居た。

品川で京濱電車に乗り換えた。三次も未だ先の男が引越してから一度も訪ねたことがなかつた。で車掌に訊いて、青物横丁で降りた。

二人は角の八百屋で訊いて、だん〳〵山の方へ坂を登つて行つた。道の二叉に別れる時、煙草屋で訊いて、生墻に添うた道を這入つて行つた。最う町の家並はない、所々垣を周らした邸が有るばかりだ。一二丁行くと最う心細く成つた。二軒許り道に添うたしもた家の前に、若い主婦さんらしいのが子供を負んで立つて居るのを見て、

『おい、あの主婦さんに訊いて見ないか』と、三次はお延を振返つた。

『私?』と、お延はしぶ〳〵其女の傍へ行つて聲を懸けた。

女は一人の婆さんと向ひ合つて、此方に脊を向けながら、何やら話して居たが、お延の聲を聞いて急に振返つた。見ると、額の四角な、鼻のひしやげた、口の大きい、何處と云つて取所のない女だが、それでも人の主婦さんではない、確に娘だ。それも處女だ。處女だと云ふ印象が明々と顔に流れて居た。

お延は其娘と二語三語言葉を交して居たが、やがて三次の傍へ歸つて來た。

『矢張知らないんですつて。でも、此先に大きな乾物屋が有るから、其店へ行けば、此邊のことは何でも知つてるんだ相ですよ。』

『左様か、ぢや其店迄行かう。』
二人は又土埃の白い道を辿つて歩き出した。
『ねえ、あの女お主婦さんぢやア有りませんでしたわね』と、お延が言つた。『娘ですよ。』
『うむ、俺も左様思つた。だが、處女と云ふものは好いものだねえ。あんな不味い面をして居ながら何處か欺かれない純潔さが有るよ。それが顔へ表はれて居るよ。』
『左様ねえ』と、お延は溜息を吐いた。『處女と處女を失つた者とは如何したつて違ふわねえ。隠すに隠されないわ。』
『うむ、昔の畫家が聖母を處女にしたのは其の所因が有る。』
三次は自分一人の考へを追うて居た。
乾物屋の小僧に訊くと矢張知らない。番頭が張場から出て來て教えて呉れたには、此處を又一丁許り戻つて、植木屋の横から原を突切つて行けば、向うに高い杉の木立がある。訪ぬる畫工は其中の一軒家に住んで居るんだと云ふ。二人は又言はれた通りに取つて返した。成程、原の向うに杉の木立がある。最うちら／＼灯火が漏れて居た。
原の中の十字路まで來た時、三次はお延を振返つた。『如何だ、お前も一緒に向う迄行くかい。』
『私？ 如何でも可いことよ。』
『如何でも可いぢやア困るな。お前は向うの男を知らないだらう。』
『えゝ、知らないわ。』
『知らなきや、此處に待つてるさ。二人揃つてお弔みに行くのも可笑しいよ。』

『ぢやア此處に待つてるわ』と、お延は素直に言つた。『でも、早く出て來て下さらなきや可厭アよ。』
『直ぐッたつて、相手のあることだから左樣は行かないさ。だが、お前さんを此處に殘してあること
だけは忘れやアしないよ。』
『左樣、それなら可いわ。』
二人は寄添うて手を握り合つた。そして、三次は一人杉の木立を目蒐けて駈け出した。森の縁まで
着いて振返つた時、お延はなほ十字路に立つて居た。
一時間半許りして、やう〳〵三次は提灯に送られて森を出て來た。野原にはさま〴〵な蟲が乾き切
つた草の中に鳴いて居た。三次はお延のしやがんでる傍へ近づいて、
『延さん、未だこんな所に居たのかい』と、聲を懸けた。『俺は又ずつと町の方へでも行つてるかと思
つたよ。』
『だつて、此處で待つてろと言つたぢや有りませんか』と、お延も裾を拂つて立上がつた。
『左樣か、そりやア氣の毒をしたね。隨分待つたらう。』
『えゝ、隨分長かつたわ。』お延は男の顏を見たら、いきなり左樣言つて遣らうと思つて居たのが、何
だか言ひ反つたやうな氣もして、稈蒔ながらそれだけ言つた。
『なに、これでも旨く遣つて出て來たんだよ。〇〇の野郎奴、錢湯から上がつて來て、俺の顏を見る
と、直ぐに又酒にせうと言ふのを、芝の叔母さんが惡いからと言つて、漸と遁れて來たのさ。彼奴も
大切の細君を亡くしてから、些と如何かして居るらしいね、酒ばかり飲んでるやうだよ。だが、お前、

あんな所に一人居て怖いことはなかつたかい。』
『怖いことはないわ、後から〳〵人通りが有るんですもの。只、通りがゝりの人が皆「如何かなすつたんですか」とか、「道がお解りに成らないのですか」とか、屹度訊くんですもの、本當に困つちまつたわ。「いゝえ」と頭振を掉ると「あゝ、御近隣の方ですか」さ、一人で合點して行くのよ。』
『そりやア面白いね。』
『面白くないわ』と、お延は男の顔を見返して遣つた。『でも、○○さんは本當にお氣の毒ね。』
『うむ、氣の毒と言へば氣の毒さ。だが、あの男のは悲しいのが又嬉しいんだからね。一緒に酒でも飲んで見い、ちびり〳〵盃を舐めるやうにしては、徹宵細君の話を聞かされるよ。』
『でも、矢張それだけ情が有るんだわ。』
『情が有るんだか無いんだか、知らないが、兎に角相手に捕まつた者は耐らないよ』と言ひながら、三次は不圖立停まつた。『おい、俺ア腹が減つたよ。』
お延は何やら解らな相であつたが、急に笑ひ出した。『何です、急にそんな事言ひ出して――道の上で可笑しいぢや有りませんか。』
『些とも可笑しいことないよ。夕飯が喰ひたく成つたから喰ひたいと言ふのだ。』
『だつて、こんな所ぢやア仕方がないでせう。兎に角品川迄參りませうよ。』
『行くさ。』
二人は品川の停車場前にある安料理の海に臨んだ涼しい裏二階に相對して居た。夕飯時の一しきり

客の立て込む時刻が過ぎた後とて、二人の外に殆ど客はない。隣座敷に商人らしい二人の客が頻に錢勘定をして居るのと、表の方に二三人女連れの客が有るばかりだ。三次は誂へた物の來る間、枝豆で冷し麥酒をぐびり〳〵と飲んで居た。其の枝豆を取つて口へ抛り込む手際の見事で素早いこと、眞個手品か輕業でも見て居るやうだ。見る〳〵空の盃洗に豆莢の山をつくつて行く。お延は感心したやうに男の手許を見守つて居たが、

『ね、そんなに召上つちやア好くないでせう、幾許お所好な物でも――』と言つて見た。

『うむ、好くないかも知れない。』

『ぢや、お止しに成つたら可いでせう』と、お延は使つて居た團扇で相手の手を抑へるやうにした。

『うむ、止さう』と言つたまゝ、三次は手に取つた枝豆を離した。今度は卷煙草を取上げてぷか〳〵喫ひ始めた一本喫ひ終ると、又一本に火を點けた。

其處へ女中が誂へた物を持つて來た。

『おい、其のあなごの蒲燒を喰つて御覧な。あなごは大森が本場だからね。』

『左樣、如何してゞせう』と言ひながら、お延は團扇を下に置いて、皿の物に箸を着けた。『成程、美味しいわね。』

『旨味いだらう。すべて小肴は品川の海で捕れた物が好いとしたものだよ。何しろ大都會の吐き出す惡水を呑んで育つんだからね。』

『まア汚ないことを言ふのね』と、お延は手に持つた箸を捨てゝ、仰山に口端を歪めた。「まア何汚ないことが有るものか」と、三次は笑つて女の顏を見遣りながら、又煙草に火を點けた。

氣持が惡いと思つたら麥酒でも飮むさ。」
「えゝ、麥酒を頂戴！」と、お延は半巾で口端を抑へながら洋盃を差出した。
三次はたぶ／＼と麥酒を注いで遣つた。そして、又一本煙草に火を點けながら、女が顔を蹙めて一ト思ひに盃の麥酒を嚥んで遣る容子を見守つて居た。お延が胸を敲きながら洋盃を下に置くのを待つて、又それにたぶ／＼と注いだ。
「そんなに注いだつて飮めないことよ。」
「うむ、飮めるさ。飮んで御覽よ。」
お延は最う顔を赧くしながら、それでも盃の縁を唇へ持つて行つた。そして、藥でも飮むやうに少しづゝ舐めた。
一本、又一本、後から／＼と煙草に火を點けながら、三次は女の顔を覗き込むやうにして居た。やがて何と思つたか手に持つた煙草の吸殼を椽側越しに海の方へ抛つて遣りながら、
「女が酒に醉つて、白粉を剝がした顔と云ふものは、眞個現實曝露だね。」
「可厭アよ、そんな事言つちやア――無理に飮ませて置いて。」
お延は兩手で顔を抑へて仕舞つた。
「だつてね、お前が俺を知るやうに成つた前とは全然顔が變つて來たもの。先刻途中であの娘に會つた時も左樣思つたんだが、眞個處女を捨てる――女が肉の快樂をおぼえると云ふことには、何の向上も伴はないね――精神にも、肉體にも。只處女の純潔さが失はれて、取返し難い人間性の墮落が有るばかりだよ。お前も隨分荒んだ顔に成つたものだね。毎日鏡を見て居て、自分でもそれが解らないの

かい、え〻?」
お延は兩手で顏を抑へたまゝ、だん〳〵俯伏して行つた。やがて男の言葉が切れた時、其手を離してぢろりと相手の顏を見遣つたが、其儘又疊の上に突伏して仕舞つた。
「だつて、そりやア誰がしたの――貴方が自分で爲たんぢやありませんか、自分で斯んな取返しの附かない身體にして置きながら、そんな、そんな酷い事を私に――」
女は到頭身を顫はしてしく〳〵泣き出した。「餘まり酷いわ、酷いわ、そんな事言つて私を虐めるのは――」
「虐めるんぢやアないさ。只事實を擧げてるばかりだ」と、男も何時か眞顏に成つて居た。「又俺は自分の責任を回避する譯でもない。お前さんを左樣したのは私さ――それも知つてるよ。」
「それを知つてる位なら、直に此場で元の身體にして下さい。元の身體にして置いてから、何とならと言ふが可い――」
男は惘れたやうに女の姿を見守つた。髪の毛は口惜し相にぶる〳〵顫えて居た。
「馬鹿だなア」と、三次は口の中で呟いた。そして、四邊を憚るやうに見廻しながら、女の耳許へ口を寄せるやうにして、「ぢやアお前は本當に元の身體にして貰ひたいのかい――俺と斯う成つたのが後悔されるのかい。」
「左樣ぢやアない」と、お延は頭振を掉つた。
「ぢやア他に仕方がないぢやないか。俺も如何にも成らないことを言つてるんだよ。只、俺は――お前にやア限らないことだがね、俺に依つて女に成つた女で、一人も其女を向上させた――何等かの點

で其女を好くした覺えがない。皆惡くするばかりだ。それを思ふと、自分の爲たことながら、自分で耐らなく可厭アな氣がするんだよ。」

三次は女を宥めるやうな積りで、却て女の可厭がるやうな事ばかり言つて居た。

「だがね、女が母に成ると云ふことは又別だよ」と、三次は言葉を繼いだ。「マザアフードと云ふものには又別な意味が有る。俺も子を抱いて居る母親の顏を見て、些とも可厭な氣はしない。母親の顏には光明も有れば希望も有るんだもの――只、處女が一足飛びに母親に成つて呉れると可いんだけれどもね。それが出來ないからな――それが出來たのは聖母マリヤだけだよ。」

三次はふッつり默つて仕舞つた。お延も默つて聽いて居た。未だ顏を上げない。

やがて三次は卷煙草に火を點けて、それを持つたまゝ、椽側へ出て欄に凭つた。空は曇つたのかお臺場の邊り黑々として、漁火一つ見えない。只滿潮と見えて、直ぐ下の石垣をちやぶん／＼と波が洗つて居る。

三次は欄に凭つたまゝ、何時迄も物を思つて居た。

――をはり――

感傷集

生田長江

○

ひやゝかにみづをたゝへて
かくあればひとはしらじ母
ひをふきしやまのあとゝも

○

おもひでのふるきをたづね
あたらしきなみだをしると
よきふみにしるしととめよ

○

かのひともいきてこのよに
このひなほありたまふやと
ひたぶるにこゝろのこりて
えもしなずながらへをれば
さけのみてゑひなきをする
おもしろきをとことなれり

○

たちつくしものをおもへば
ものみなのものがたりめき
わがかたにつきかたぶきぬ

○

うらわかきこひのをはりに
よきほどのなみだながしつ
はらからになれといはずば

をみなごもかしこかりけり

○

ふるきさけのかめにあるより
ふるきこひのむねにあるより
よきはなしよろしきはなし

○

みこゝろをはかりうべくば
やまぶきのみにおぼえなき
とりさたもあれかしとこそ

○

よりちかくあるをねがはず
やがてまたとふのきたまふ

きみゆゑにきみ一としるゆゑに

○

うたがひのあめふりしきる
よひやみはこひのみかさも
いやまさりまさりゆくかな

○

あひしらぬめでたきひとの
おもかげをまぼろしにみる
わかものゝわかきこゝろに
けうもまたきみをまちけり

戀人を

イスラエルの子等のエホバ神を恐れしごとく、
愛すべき未開の民共の
偶像を拜し、庶物を拜したるごとく
戀人はその戀人をかしこみ畏れて、
まのあたり見たることとなし、
しみじみと見たることとなし、
——戀人をその戀人は。

おろかなる巡禮

とり返しがたきこしかたのごとくなつかしきもの、
善き人の犯せる美しき罪惡のごとくうるはしきもの、
なまめかしき婦人の整はぬ一部分のごとく心をひくもの、
誘惑の水に自負心の姿をうつす
牡鹿の角のごとくよろこばしきもの、
かりそめの病と、回癒期のかろき痛みと、
ちさく愛らしき物を眺めてながす甘き涙と、

うらわかき死とのごとく慕はしきものを、
いたづらにこれらの物を求めもとめて、
やゝ老いし我等の心もなほ
おろかなる巡禮の途上にあり

哲學

われは心より汝を愛す——その我のまた
汝より愛せられむことをねがふは何故とや？
愛する汝を更により深く愛し得むことの爲めぞ！
むくひを求めざる愛は愛ならじ。

別れ行く人々よ

別れ行く人々よ、
わかれゆく時の涙を惜め。

互に涙を見せ合ふことも出來ぬ
本當の寂しさの來たときに泣け。
自分ひとり忘れずにゐると思ふ
その悲しさに、その嬉しさにはじめて泣けよ。

編輯だより

■どうだろうかと思つて居たビアトリスも、思ひの外の成績で、此分なら充分續けてゆかれるだろうと思ふやうになりました。ほんとに嬉しい事であります。それは此誌の微力なるは、今更言はなくても、亦言はれなくても分り切つた話であります。然し私たちは今を以つて滿足してゐないのは勿論の話です、出來ないながらも、亦目には見えぬながらも、どうか内容を良くしてゆきたいと心がけて居るのです、其歩みのおそいのをお笑ひ下さるな。

■いよいよ氣持のいゝ秋が來ました。始めのうちはそれでもまだ長くていけないでせうが、月末にでもなつたら一度皆樣とあまり遠くない處の野か山に、遠足(?)にでも出かけたいと思つて居ります。いづれ其事の定まり次第御通知をするかもしれませんし、又來月にのばして來月の誌上で發表するかもしれません、何にしてもビアトリスの人たちは、出來るだけ仲よくお知り合ひになつてゆきたいものです。なほ皆樣に何か面白いお考へでもありましたら御通知下さいませんか、參考に伺つておいて出來るだけ面白さうな事を致します。

■會員の方でビアトリスの爲めに少からぬ御寄附を下されたC樣に心から感謝致します、御希望に依つて御性名は發表致しませぬが御志は永く紀念致します。

■本社同人山田邦子の歌集「光を慕ひつゝ」を、もし御求め下さる方が御座いますならば本社へ直接御申込み下されば特に一部五十錢に割引致します、なほ同歌集の批評は來月號に、原阿佐緒樣がなさつて下さるはづで御座います。

■暑い〱といつたのも束の間、早初秋の風そよ〱と秋に通ふやうになりました。此月は社に於ても却々多忙な月であらうと思ひます。先づ五日にはビアトリス文藝研究會の第一の會合を下澁谷一八五五(市内線エビス停留場下車一町計り元へ戻り電車通左側)の杉浦翠子氏宅に開きます以後毎月同日に同氏のお宅で開きますから社員及びビアトリス文藝研究會員の方は別段御通知を差上げなくとも被入して下さるやうにお願ひいたします。

■次に二十日前後には故人となつた女流作家の追悼會と云ふやうなものを開きたいと思ひます。未だ時日も確定いたしませんがいづれ其節には御通知申上げますから社員及ビアトリス文藝研究會員の方はお出を願ひたいと存じます

■今月頂きました原稿の中で吉屋信子氏、齋賀琴子氏、坂本野母氏、小林岔子氏、小林つや子氏、首藤郁子氏のは載せ切れず止むを得ず次號に廻りましたから右御寄稿下さつた方及讀者にお斷りして置きます。尙水野葉舟先生のお作も頂きましたのですがこれは時日が遲れたために掲載することが出來ないのは遺憾でした、これも先生及讀者の諸氏にお斷り申して置きます。

■猶ビアトリス文藝研究會員の方の短歌の原稿は社宛でなく府下代々木山谷一〇八今井方山田邦子宛にお送り願ひたいと思ひます。

雜誌規定

□毎月一回一日發行

□定價一册金貳拾五錢（郵税壹錢五厘）

□前金購讀料四ヶ月分（壹圓）　六ヶ月分（壹圓四拾五錢）
一ヶ年分（貳圓九拾錢）

□廣告料一頁 特（三拾圓）　一等（貳拾圓）　貳等（拾五圓）
三等（拾圓）　半頁（五圓）

□郵券代用は壹錢貳錢に限る（但し一割增）

□編輯、經營、會員申込上の事務は一切ビアトリス社宛のこと

□原稿〆切期日は十日限りとす。

大正五年八月廿八日印刷納本
大正五年九月一日發行

編輯兼發行人　東京市牛込區築地町六番地　山田たづ

印刷人　東京市麹町區紀尾井町三番地　金澤求也

印刷所　東京市麹町區紀尾井町三番地　元眞社

發行所　東京市牛込區築地町六番地　ビアトリス社

發賣所
東京堂
東海堂
良明堂
北隆館

島木赤彦氏序
太田水穂氏序
窪田空穂氏序

山田邦子著

歌集 光を慕ひつゝ

■六月五日發行■
■菊半截形極美本■
■定價金六拾錢■
■郵稅金六錢■

世を呪ひ、人を呪ひ、己れを呪へる底より、言ひがたき悲痛をもて、何物にか祈らんとせし女史の歌は、既に公表せられて若き久々の胸に深き感銘を與へたり。今や、女史は、其熱き涙の底よりして、遂に喜悦の光を見出しぬ。迷ひの谷をぬけて、深遠限りなき愛の光に近づかんとしつゝあるなり。見よ、其聲に強き權威湧き、其調べに深き感謝躍る。生命の芽生の力は收めて此一卷にあり。

大賣捌所

東京神田 東京堂
東京銀座 東海堂
東京京橋 良明堂
東京神田 上田屋

發行所 東京市牛込區山吹町二六〇 曙光社